

彼が遺した最後の嘘

〈記憶鑑定士・相羽朔とAIの遺言〉

小説 太郎

目次

序章	歪んだ追憶	5
第一章	静寂の密室	17
第二章	再生される一日	33
第三章	二つの顔を持つ同僚	53
第四章	見えない協力者	69
第五章	書き換えられた真実	85
第六章	最後のメッセーじ	101
終章	夜明けの鑑定	117

序章

歪んだ追憶

夜光虫の死骸のように、無数の光が闇に浮かんでいた。

地上三十階に位置するこの事務所の窓は、まるで巨大な額縁だ。切り取られた東京の夜景は現実感を失い、精巧な絵画にも、あるいは静止した映像にも見えた。煌めく光の粒子は、そこに住まう人々の営みの証であるはずなのに、今の相羽朔^{あはば}の目には、ただ無機質で冷たい点の集合体にしか映らない。

室内は、窓の外の喧騒が嘘のように静まり返っていた。防音設計の施された壁が街の音を完全に遮断している。聞こえるのは朔自身の規則正しい呼吸の音と、彼の目の前で静かに熱を放つ巨大な湾曲モニターの駆動音だけだ。

「相羽記憶分析事務所」。それが、朔が営むこの城の名称だった。所員は朔ひとり。訪れる客もそのほとんどが警察関係者か、あるいは司法の人間と決まっている。彼らが持ち込んでくるのは、決まって人の「記憶」だ。それも、事件によって命を奪われた死者の記憶である。

近年の技術革新は、ついに人間の脳という最も不可侵な領域に足を踏み入れた。特殊な技術を用いることで、死後間もない人間の脳から特定の期間の記憶を映像として抽出することが可能になったのだ。それは「記憶潜行」と呼ばれ、行き詰まった捜査における最後の切り札として、限定的ながら導入されていた。

しかし、そこで取り出された映像は決して万能な証拠にはなり得ない。記憶とは、記録ではないからだ。

喜び、怒り、悲しみ、憎悪。そういった強い感情や個人の思い込み、あるいは願望によって事実は容易に捻じ曲げられる。ある人間が「見た」と信じている光景が、必ずしも真実の姿を映しているとは限らない。むしろ、その逆であることの方が多い。抽出された記憶映像は、いわば極めて主観的な一人称視点の映画のようなものだ。

その歪みを見抜き、映像の中に含まれる僅かな客観的事実を拾い上げ、その信憑性を判断する。それが朔の職業——「記憶鑑定士」の仕事だった。

朔は革張りの椅子に深く身を沈め、ぼんやりとモニターを眺めていた。電源は入っているが今は何も映し出されておらず、ただ暗闇が広がっているだけだ。その闇の向こう側に、朔はひとつの映像を思い描いていた。この一年間、彼の脳裏に焼き付いて離れない、あの日の記憶を。リモコンを手に取り操作する。モニターの暗闇に、白い文字で『事件番号704号…西多摩少女連続誘拐殺人事件・参考人記憶映像』という文字列が浮かび上がった。エンターキーを押すと、世界が色づいた。

それは、ある男の記憶だった。

映像は、雨に煙る雑木林の中から始まった。視点が低く、小刻みに揺れている。地面を覆う濡れた落ち葉が、視界の端で忙しく流れていく。男の荒い息遣いが音響装置を通じて事務所の空気を震わせた。男は走っていた。何かから逃げるように、あるいは何かを必死で追いかけるように。

「ま、待ってくれ！ あかり！」

男の喉から絞り出された声が響く。声の主は、当時四十二歳だった木島雄介。この事件で最愛の娘を失った父親だ。映像は彼の記憶。娘の「あかり」ちゃんは何者かに連れ去られるのをすぐ近くで目撃してしまった父親の、絶望的な追跡の記録だった。

朔の指がリモコンの上を滑り、再生速度を上げる。木々の間を走り抜ける映像がさらに速度を増す。やがて前方に開けた場所が見えてきた。古い神社の境内だ。そこに一台の黒い車が停まっているのが見える。

朔は再生を止め、映像を静止させた。

神社の境内。雨に打たれる鳥居。そしてその下に停められた黒い車。後部座席のドアが開き、男が姿を現す。男は抵抗する幼い少女の腕を掴んでいた。あかりちゃんだ。彼女が履いていた赤い長靴が、記憶の中で鮮烈な色彩を放っている。

「やめろ！ その子を離せ！」

木島が叫ぶ。その声に反応し、車から降りてきた男がゆっくりとこちらを振り返った。

朔はリモコンの拡大ボタンを押した。静止した映像の中の男の顔が、ぐんぐんと大きくなっていく。雨粒と木島の激情によって映像の焦点は甘い、その顔立ちは十分に認識できた。鋭い目つき、薄い唇。頬には大きな傷跡がある。間違いない。この顔こそが、木島の記憶に残された犯人の姿だ。

警察はこの記憶映像を元に、顔の特徴が一致する前科者の男、高梨という男を全国に指名手配し、一週間後に逮捕した。世間は安堵し、警察の新たな捜査手法を称賛した。朔もまた鑑定士として「この記憶映像は、強い精神的衝撃による細部の欠落や歪みは見られるものの、中核となる犯人の人相に関する記憶は信憑性が高いと判断する」という鑑定書を提出した。

それが、間違いの始まりだった。

高梨は逮捕当初から一貫して犯行を否認し続けた。彼には、犯行時刻に都心で買い物をしていたという完璧なアリバイがあったのだ。防犯カメラの映像、クレジットカードの利用履歴。それらの客観的な証拠が、彼の無実を証明していた。

では、木島が見たこの男の顔は一体何だったのか。

警察は混乱した。世論は一転して警察を非難し、記憶潜行という捜査手法そのものへの懐疑的な声が噴出した。結局、高梨は証拠不十分で釈放され、真犯人と目される男はその間に海外へと高飛びしてしまった。今も、その行方は知れない。

朔は再び映像を再生させた。

車に娘を押し込もうとする犯人。それを止めようと駆け寄る木島。犯人は忌々しげに木島を睨みつけ、懷から何かを取り出した。閃光。木島の視界が白く染まり、彼はその場に崩れ落ちる。意識が遠のく中、彼が最後に見たのは、赤い長靴をばたつかせながら闇に消えていく娘の姿と、閉ざされた車のドアに映った自分の絶望に歪んだ顔だった。

映像はそこで途切れる。

朔は目を閉じ、深く息を吸った。一年経った今でもこの映像を見ると、胸が締め付けられるような痛みを感じる。なぜ、自分は判断を誤ったのか。鑑定書を提出する直前まで、朔の中にはひとつの疑念があった。

それは、木島の記憶の中の「雨」だった。

気象庁の記録によれば、事件があった日のあの時間、西多摩地区に雨は降っていなかった。厚い雲が空を覆ってはいたが、雨が降り始めたのは事件発生から一時間後のことだ。

なぜ、木島の記憶は雨に濡れていたのか。

当時の朔は、それを「精神的衝撃による記憶の混濁」と結論付けた。娘を目の前で奪われた父親の心象風景が、現実の光景に「雨」というフィルターをかけてしまったのだと。それは記憶鑑定の世界では決して珍しい現象ではない。

だが、もしそれが単なる混濁ではなかったとしたら？ もし、その「雨」にこそ真実を解き明かす鍵が隠されていたとしたら？

朔はもう一度映像を巻き戻し、犯人の顔が映る場面で静止させた。拡大された犯人の顔。頬の傷。鋭い目つき。

「なぜ、あなたはこんな顔をしている？」

朔はモニターに向かって静かに語りかけた。まるで、映像の中の男に問いかけるように。

木島は、犯人の顔を「はつきりと見た」と証言した。しかし、それは本当だろうか。娘を奪われた父親の憎悪が、犯人の顔をより凶悪に、より残忍に「作り変え」てしまったのではないか。人間の記憶は強い感情によって簡単に上書きされてしまう。憎しみは相手の顔に無かったはずの傷を刻み込み、恐怖は相手の目を獣のように光らせる。

逮捕された高梨の顔に傷は無かった。目つきも、記憶映像の男ほど鋭くはなかった。だが、

全体的な骨格や雰囲気はよく似ていた。おそらく木島は高梨とよく似た別人を目撃したのだ。そして彼の記憶の中で犯人の顔は、彼の憎悪を体现するかのように、高梨の顔を元にしてより邪悪なものへと変貌していった。

そして、雨。

朔はある仮説にたどり着いていた。木島は事件の後、自らを責め続けた。「なぜ、助けられなかったのか」。その自責の念が、彼に「自分はずぶ濡れになって必死で娘を追いかけたのだ」という偽りの記憶を植え付けたのではないか。雨は彼の流した涙の象徴であり、犯行を止められなかった無力感の表れだったのかもしれない。

「記憶は、どこまでも主観的で、脆いものだ」

朔は、誰に言うでもなく呟いた。

それは、この一年で彼が骨身に沁みて悟った真実だった。あの時、自分は木島の悲しみに同情しすぎていた。彼の記憶に寄り添いすぎた結果、その奥に潜む歪みを見過ごしてしまったのだ。鑑定士として最も犯してはならない過ち。感情に流され、客観性を見失うこと。

その失敗が、ひとりの人間を冤罪の淵に追いやり、真犯人を社会に解き放ってしまった。朔はそれ以来、人と深く関わることを避けるようになった。感情は判断を鈍らせる毒だ。必要な

のは、どこまでも冷静な観察眼と鉄のような意志。もう二度と、過ちは繰り返さない。

彼は自分自身にそう誓い、この一年間、たった一人で過去の事件の記憶映像を分析し続けてきた。それは贖罪の儀式にも似ていた。歪んだ記憶の破片を拾い集め、本来あるべきだった真実の形を復元しようと試みる、終わりのない作業。

その時だった。

静寂を切り裂くように、けたたましいベル音が鳴り響いた。デスクの上に置かれた外部との唯一の通信手段である黒電話のベルが、心臓を鷲掴みにするような暴力的な音量で鳴り続けている。

朔はゆつくりと顔を上げた。この電話が鳴る時は決まっている。新たな「記憶」が、彼の鑑定を待っている時だ。

受話器を取る。雑音の向こうから聞き慣れた無骨な声が聞こえてきた。警視庁捜査一課の刑事、本郷だった。

「相羽先生か。夜分にすまない」

「……本郷さん。何かありましたか」

感情を排した平坦な声で、朔は応じた。

「ああ。厄介なのが一つな」

電話の向こうで、本郷が疲れたように息を吐くのが分かった。

「未来創研の研究所で死体が出た。その研究員だ。それも、完全な密室でな」

未来創研。その名前に、朔はわずかに眉をひそめた。人工知能や情報技術の分野で、今最も注目を集めている巨大企業だ。

「自殺の線が濃厚だが、いくつか妙な点があつてな。上は、最後の手段を使うと決めたようだ」
本郷の言葉の意味を、朔は即座に理解した。

「……記憶潜行、ですか」

「ああ。死後硬直の状態から見て、まだぎりぎり間に合う。至急、現場に来てほしい。君の力が必要だ」

受話器を握る朔の手に、わずかに力がこもる。また誰かの死と、その歪んだ記憶に向き合わなければならぬ。あの絶望的な映像が脳裏をよぎる。一瞬、断ろうかという考えが頭をかすめた。自分に、その資格があるのだろうか、と。

だが、その迷いはすぐに消えた。逃げることはできない。逃げれば、自分は永遠にこの歪んだ追憶の中に囚われたままだ。過去の過ちを乗り越える方法は一つしかない。新たな事件と向

き合い、今度こそ感情に惑わされずに真実だけを見抜くこと。

朔は静かに息を吸い込み、決意を固めた。

「分かりました。すぐに向かいます」

受話器を置き、立ち上がる。湾曲モニターにはまだ木島の記憶映像が映し出されていた。雨の中、犯人の男が嘲るようにこちらを見ている。その顔が、一瞬ぐにやりと歪んだように見えた。

朔は、その残像を振り払うようにモニターの電源を切った。

部屋は再び、窓の外の夜景だけを映す静かな闇に包まれた。彼はクローゼットからいつもと同じ黒いコートを取り出すと、迷いのない足取りで事務所のドアへと向かった。

これから始まる新たな事件が、彼の過去の傷と深く繋がっていくことになるのを、まだ知る由もなかった。ただ胸の中に冷たい決意を宿し、彼は深夜のオフィスビルを後にした。

街の光が、彼の孤独な影をアスファルトに長く、長く伸ばしていた。

第一章

静寂の密室

相羽朔を乗せた自動運転のタクシーは、湾岸エリアにそびえ立つ漆黒の塔を目指して滑るように高速道路を進んでいた。窓の外では朝の光が工業地帯の無機質な建造物群を銀色に染め上げている。空と海の境界は曖昧で、世界全体が巨大な金属の箱の中にあるかのような錯覚を覚えた。

やがてタクシーは減速し、目的地の前で静かに停止した。

「未来創研・中央研究所」

ゲートの上に掲げられた飾り気のない金属の文字が、朝日を鈍く反射していた。建物は黒曜石を精密に削り出して作ったかのような、継ぎ目の見えない高層ビルだった。窓は極端に少なく、まるで外部からの侵入を一切拒絶するかのような要塞じみた威圧感を放っている。日本の科学技術の最先端を走り、時に世界を驚かせるような革新的な発明を生み出し続ける企業。その心臓部が今、朔の目の前にあった。

すでにゲートの前には数台の警察車両が停まっており、制服警官が慌ただしく出入りしていた。朔がタクシーを降りると、冷たい潮風がコートの裾を揺らす。その風の中に微かに事件の匂いが混じっているような気がした。

「相羽先生！」

ゲートの脇で待っていたらしい巨漢の男が、朔の姿を認めて駆け寄ってきた。警視庁捜査一課の刑事、本郷だ。着古したトレンチコートがその強面と相まって、一昔前の映画から抜け出してきた登場人物のような印象を与える。

「お待たせしました、本郷さん」

朔は感情の読めない平坦な声で応じた。本郷はそんな朔の態度には慣れっこといった様子で頷き、分厚い手で朔の肩を軽く叩いた。

「いや、こっちが無理を言った。朝早くからすまない」

「それで、状況は？」

朔は挨拶もそこそこに本題を切り出した。無駄な会話は好まない。本郷もそれを承知しており、すぐに険しい表情に戻った。

「被害者は長谷部耕平、三十五歳。ここの主任研究員だ。専門は……まあ、なんだ、すごく難しいことをやっていたらしい。人工知能とか、そういう分野の天才だったと聞いている」

二人は、厳しい顔つきの警備員が立つ通用口へと歩き始めた。本郷が警察手帳を提示すると、警備員は無言で頭を下げ、重々しい金属の扉を開けた。

内部は、外観の印象を裏切らない白と銀を基調とした無機質な空間だった。長い廊下には人

の気配がなく、聞こえるのは二人の革靴の音と壁の向こうからかすかに響く機械の駆動音だけだ。まるで巨大な生き物の体内に迷い込んだかのような、奇妙な圧迫感があった。

「発見されたのは今朝の七時ごろ。出勤してきた同僚が研究室のドアが開かないのを不審に思ってた。何度呼びかけても応答がないんで警備に連絡して、最終的にドアを破壊して中に入った。そしたら……もう冷たくなっていたそうだ」

「死因は？」

「それが分からん。体に目立った外傷は一切ない。毒物なんかの反応も今のところは出ていない。ただ、ぐったりと椅子に座って眠るように死んでいた、としか言いようがない」

エレベーターに乗り込み、最上階である十五階のボタンを本郷が押す。扉が閉まると、ほとんど振動も感じさせずに機体は上昇を始めた。

「一番の問題は現場の状況だ。完全な密室だった」

「密室……」

朔の口からかすかに言葉が漏れた。それは、事件が単純なものではないことを示す不吉な響きを持っていた。

「ああ。被害者の研究室はオートロック式の電子錠なんだが、内側から施錠されていた。そ

れだけじゃない。ご丁寧にも物理的な補助錠までかけられていた。ドアチェーンみたいなものだ。もちろん、内側からしかかけられないやつだ」

「窓は？」

「はめ殺しだ。設計上、開けることはできない。強化ガラスで割れた形跡もなかった。換気口も調べさせたが、赤ん坊でも通れそうにないサイズだ。つまり犯人がいたとすれば、内側から鍵をかけて壁を通り抜けて消えたとしたか考えられん」

十五階に到着し、エレベーターの扉が開く。そこは他の階とは雰囲気違っていた。フロア全体が一つの広大な空間になっており、中央にガラス張りの部屋がいくつか点在している。まるで未来都市の模型のようだ。その一角にだけ黄色い規制線が張り巡らされ、鑑識課員たちが白い防護服を着て黙々と作業を続けていた。

「ここが現場だ」

本郷に促され、朔は規制線をくぐった。ガラス張りの壁の向こうに問題の研究室が見える。ドアは蝶番のあたりから無残に破壊され、辛うじて枠にぶら下がっている状態だった。

「どっぞ」

鑑識の若い男が朔に手袋と靴カバーを差し出す。朔はそれらを無言で受け取り、手早く身に

つけると、静かに研究室の中へと足を踏み入れた。

中は想像していたよりも生活感のある空間だった。広さは二十畳ほどだろうか。壁の一面は巨大なモニターで埋め尽くされ、複雑な数式や図形が明滅を繰り返している。その手前にはいくつもの電子機器が接続された巨大な作業机。しかし部屋の隅には簡素なベッドや読みかけの本が積まれた小さなテーブル、それにコーヒーマーカーまで置かれている。被害者である長谷部がここで寝食を忘れて研究に没頭していたであろうことが窺えた。

そして、部屋の中央。作業机の前に置かれた背もたれの高い椅子に、一人の男が座っていた。それが長谷部耕平だった。

彼は白いシャツにスラックスというラフな服装で、まるで研究の途中で少しうたた寝でもしているかのように、安らかな顔で椅子に身を預けていた。年の頃は本郷の言った通り三十代半ば。少し痩せ型で知的な顔立ちをしている。髪には少し寝癖がついていた。

朔は遺体には近づかず、部屋全体を見渡すようにゆっくりと視線を動かした。空気はひんやりとしていて、機械油と淹れたてのコーヒーが混じったような独特の匂いがした。部屋は全体的に整然としている。本棚の蔵書は分野ごとにきれいに並べられ、机の上の書類もきちんと整理されている。几帳面な性格の持ち主だったのだろう。

「どう思う、先生」

本郷が低い声で尋ねた。

「自殺か、それとも……」

「まだ分かりません」

朔は短く答えると、遺体を遠巻きに観察しながら鑑識課員の邪魔にならないように室内を歩き始めた。彼は他の捜査員が注目するような場所には目もくれない。ドアの鍵、窓の状態、そういった「密室」を構成する要素には、あえて意識を向けないようにしているかのようにだった。彼の目は、もっと些細なものに向けられていた。床に落ちている一本のボールペン。ゴミ箱の中に捨てられている、しわくちゃになった数枚の計算用紙。コーヒーマーカーに残った黒い液体の量。まるで部屋そのものが発している声に耳を澄ませるかのように、朔は五感を研ぎ澄ませていた。

彼の観察によれば、この部屋には奇妙な矛盾があった。全体としては非常に整理整頓されているのに、いくつかの点において不自然な乱れが見られるのだ。

例えば、床に落ちていたボールペン。キャップは外れ、数メートル離れた場所に転がっている。几帳面な長谷部がペンをこのように無造作に落としたままにしておくだろうか。

例えば、ゴミ箱の中身。捨てられているのはほとんどが研究に関する計算用紙のようだ。しかしその一番上に、くしゃくしゃに丸められた一枚のティッシュペーパーが乗っていた。まるで最後に何かを拭き取って、慌てて捨てたかのようだ。

そして何よりも朔の注意を引いたのは、長谷部本人の様子だった。彼は眠るような安らかな顔をしている。だがその両手は、椅子の肘掛けを固く、固く握りしめていた。爪が食い込み、指の関節が白くなるほどに。それは安らかな眠りにについている人間の仕草ではなかった。むしろ、何か計り知れない恐怖や苦痛に耐えているかのような異様な力みだった。

「何か気づいたか？」

本郷が、朔のただならぬ様子を察して声をかけた。

「……本郷さん。被害者の手のひらを調べましたか？」

「手？ ああ、鑑識が見たはずだが……。特に何もなかったと聞いている」

「もう一度、詳しく調べてみてください。何かを強く握りしめた痕跡があるかもしれません。あるいは何か微物付着の可能性も」

「分かった、伝えておこう」

本郷が頷いたのを見て、朔はゆっくりと作業机に近づいた。そこがこの部屋の心臓部であ

り、長谷部という人間の頭脳そのものだったのだろう。三台の大型モニターには今も彼の研究の痕跡が映し出されている。常人には理解不能な記号の羅列。それはまるで未知の言語で書かれた叙事詩のようにも見えた。

朔はモニターには目をくれず、キーボードの脇に無造作に置かれた一枚のメモ用紙に視線を落とした。他の書類とは離れた場所に、一枚だけぽつんと置かれている。まるで誰かに見つけてほしがっているかのようなのだ。

それは、ごく普通のどこにでもある正方形のメモ用紙だった。そこに黒いインクのペンで、いくつかの文字が書きなぐられていた。

『KL-3988 2』

朔はその文字をじっと見つめた。アルファベット、数字、そしてギリシャ文字。一見すれば何かの製品番号か、あるいは科学的なデータの一部にしか見えない。おそらく他の捜査員たちもそう判断し、気にも留めなかったのだろう。

だが、朔はそこに強烈な違和感を覚えていた。

長谷部の研究室は驚くほどに「紙」が少ない。ほとんどの情報は電子化され、壁のモニターや手元の端末で管理されているようだった。そんな彼がなぜ、わざわざ紙のメモを、それも

たった一枚だけこんな目立つ場所に残したのか。

そして、その筆跡。走り書きのようであり、最後の「ッ」という文字だけがやけに丁寧で、まるで印を押すかのような力強さで書かれている。まるでそこに特別な意味を込めているかのようだ。

朔は手袋をした指でそっとメモ用紙をつまみ上げ、光にかざしてみた。紙の裏には何も書かれていない。特殊なインクが使われている様子もなかった。ごくありふれたメモと、そこに書かれた謎の文字列。しかし朔の直感は、これが単なる研究データではないと告げていた。これは長谷部耕平が死の際に遺した、声なきメッセージなのではないか。

「先生、そいつは？」

朔の様子に気づいた本郷が、覗き込んできた。

「ああ、ただの研究メモだろう。鑑識にも回収させてあるが、今のところ意味は分らん」

「……そうでしょうか」

朔はメモを元の場所に戻すと、静かに言った。

「僕には、これが遺書のように見えます」

「遺書？　こんな訳の分からん文字列が？」

本郷は怪訝な顔でメモを睨んだ。

「言葉による遺書とは限りません。彼のような人間なら、彼にしか分からない方法で何かを伝えようとした可能性はあります」

朔の言葉に、本郷は腕を組んで唸った。目の前の状況はあまりにも不可解なことだらけだった。内側から鍵のかかった密室、外傷のない遺体、そして謎のメモ。捜査は完全に行き詰まっていた。自殺だと断定するには動機が不明すぎるし、他殺だとすれば犯人は煙のように消えてしまったことになる。

その後の現場検証も、新たな発見をもたらすことはなかった。指紋は被害者である長谷部のものしか検出されず、第三者の侵入を示す痕跡はどこにも見つからない。捜査員たちの間に徐々に焦りと疲労の色が濃くなっていく。

午後になり、研究所の一室を借りて簡単な捜査会議が開かれた。本郷をはじめとする捜査員たちが、重苦しい雰囲気の中で報告を続ける。

「……以上のように、現時点では自殺、他殺、いずれの線でも決定的な証拠は見つかっていません」

若い刑事が報告を終えると、会議室はしんと静まり返った。誰もがこの不可解な事件をどう

扱えばいいのか、決めかねていた。

「自殺だとしたら、動機は何だ？ 彼はこの会社の将来を担う、まさに天才だったんだらう？」
捜査一課の係長が苛立たしげに言った。

「同僚からの聞き込みでは、特に悩んでいる様子はなかったようです。むしろ近々画期的な発表を控えており、非常に意欲的だった、と……」

「じゃあ、やっぱり他殺か！ だが、どうやってあの密室を作り出した？ 犯人は忍者か何かだって言うのか！」

議論は堂々巡りを繰り返すばかりで全く進展しなかった。朔は会議室の隅の椅子に座り、目を閉じて彼らの会話を聞いていた。彼の頭の中では現場の光景が何度も繰り返し再生されていた。整然とした部屋。床のボールペン。ゴミ箱のティッシュ。そして、肘掛けを強く握りしめた長谷部の手。謎のメモ。

バラバラになったパズルのピースが、意味のある形を結ばずに散乱している。それを繋ぎ合わせるには、何かが決定的に足りなかった。

その時、沈黙を破って本郷が口を開いた。その声は重く、覚悟を決めたような響きを持っていた。

「……係長。一つ、ご提案があります」

「何だ、本郷」

「このままでは事件は迷宮入りです。こうなれば、最後の手段に頼るしかありません」

最後の手段。その言葉に室内の空気がぴんと張り詰めた。誰もが本郷が何を言おうとしているのかを察したからだ。それは警察組織の中でもごく一部の人間にしか知られていない、禁じ手とも言える捜査手法だった。

「……『記憶潜行』を実施すべきです」

本郷の言葉に、係長は深く長い溜息をついた。

「お前も分かっているだろう、本郷。あれはまだ試験段階の技術だ。抽出された映像の信憑性には常に疑問符がつく。下手に手を出せば、西多摩の二の舞になるぞ」

西多摩。その地名が出た瞬間、数人の刑事がちらりと朔の方を見た。一年前の、あの忌まわしい誤認逮捕事件。記憶映像の鑑定ミスが招いた、警察の歴史に残る汚点。その中心にいたのが、今この場にいる相羽朔だった。

「危険性は承知の上です」

本郷はそんな視線を気にも留めず、強い口調で続けた。

「ですが、このままでは何も分かりません。被害者が見た『最後の光景』に何か手がかりが残されている可能性に賭けるしかない。そして、その映像の信憑性を判断させるなら、奴をおいて他にいません」

本郷の視線が、まっすぐに朔を捉えた。

「相羽先生は一度失敗した。だからこそ今度の鑑定は誰よりも慎重に、そして冷徹にやってくれるはずです。俺は、先生のあの『目』を信じたい」

会議室に再び沈黙が落ちる。誰もが係長の判断を待っていた。係長は苦虫を噛み潰したような顔でしばらく天井を仰いでいたが、やがて諦めたように大きく息を吐いた。

「……分かった。本部に許可を取ろう。だが、もしこれで何も出てこなかったら、お前にも責任を取ってもらうぞ、本郷」

「覚悟の上です」

こうして、長谷部耕平の脳から死の直前の記憶を取り出す「記憶潜行」の実施が正式に決定された。そして、その映像の真偽を判断する「記憶鑑定士」として相羽朔に白羽の矢が立ったのだ。それは彼にとって、自らの過去と再び向き合うことを意味していた。

会議が終わり、捜査員たちが慌ただしく部屋を出ていく中、朔は一人その場に残っていた。

本郷が彼の隣にどかりと腰を下ろす。

「……すまんな、先生。また厄介な役目を押し付けることになった」

「仕事ですから」

朔は感情を見せずに答えた。

「本当に引き受けてくれるか？ 西多摩の件で先生がどれだけ苦しんだか、俺だって知っている」

本郷の言葉には、無骨な彼なりの気遣いが滲んでいた。

「言ったはずです、本郷さん。僕はもう感情に流されたりはしない。見えるのはただの映像。聞こえるのはただの音。そこにある歪みを事実と照らし合わせて淡々と分析するだけです」

その声は、まるで自分自身に言い聞かせているかのようだった。

「……そうか」

本郷はそれ以上何も言わず、立ち上がった。

「記憶潜行の準備には少し時間がかかる。日程が決まったらまた連絡する。それまで、少し休んでおいてくれ」

そう言い残して、本郷も部屋を出ていった。

一人残された朔はゆっくりと立ち上がり、窓の外に目をやった。すでに日は傾き始め、空はオレンジ色と藍色が混じり合った複雑な色合いに染まっている。東京の街に再び無数の光が灯り始めていた。

長谷部耕平。三十五歳の若き天才。彼は死の直前、一体何を見ていたのだろうか。彼の記憶は、どのような形に歪んでいるのだろうか。そして、あの謎のメモに込められた意味とは。

朔はコートのポケットから自分のスマートフォンを取り出し、先ほど記憶した文字列を打ち込んだ。

『KL-3988 2』

検索ボタンを押す。しかし画面に表示されたのは「該当する情報は見つかりませんでした」という無機質なメッセージだけだった。

やはり単純な検索で分かるようなものではないらしい。

朔はスマートフォンをポケットに戻し、静かに研究所を後にした。これから始まるのは、死者の記憶という最も不確かで曖昧な迷宮への挑戦だ。だが、彼の心に迷いはなかった。

過去の過ちを償うために。そして、静寂の密室に残された声なき者の無念を晴らすために。相羽朔の、新たな鑑定が始まろうとしていた。

第二章

再生される一日

その施設は、公的な地図には存在しない場所にひっそりと建っていた。

東京湾岸からさらに奥まった埋立地。周囲には雑草の生い茂る空き地と古びた倉庫群が広がるばかりで、人影はまるでない。そんな殺風景な土地の中央に、窓ひとつない巨大なコンクリートの箱がまるで古代の遺跡のように鎮座している。ここが警視庁が極秘裏に管轄する法科学研究所第七分室、通称「潜行施設」だ。

相羽朔と本郷が重々しい防音扉を抜けて足を踏み入れたのは、「観測室」と呼ばれる部屋だった。室内は映画館をそのまま縮小したような半円形の構造になっている。正面の壁全体が緩やかに湾曲した巨大なスクリーンで覆われ、その前にリクライニング機能のついた革張りの椅子が二脚だけぽつんと置かれていた。部屋の空気は精密機械と消毒液の匂いが混じり合った、独特の冷たさを帯びている。

「準備はいいかね、相羽先生」

観測室の後方、ガラスで仕切られた調整室の中から白衣を着た初老の男がマイク越しに話しかけてきた。この施設の責任者である田所博士だ。彼は記憶潜行技術の開発における第一人者でもある。

「ごついで」

朔は短く答え、椅子に深く腰を下ろした。隣に座る本郷はどこか落ち着かない様子で、ごわごわした手で何度も自身の膝をさすっている。彼ほどのベテラン刑事でさえ、この場所の異様な雰囲気には吞まれてしまうらしい。

「では、これより対象者・長谷部耕平の記憶潜行を開始する。対象期間は死亡推定時刻より逆算して二十四時間。同期を開始します」

田所博士の冷静な声が響き渡る。ガラスの向こう側では数人の技術者が複雑な計器を前に慌ただしく指を動かしていた。隣接する処置室では、厳重な温度管理の下に安置された長谷部の遺体がヘルメットのような特殊な装置に頭部を覆われ、静かに横たわっているはずだ。その脳に微弱な電気信号を送り込み、シナプスに残された最後の残像を映像として再構築する。それが記憶潜行の原理だった。

朔は目を閉じ、意識を集中させた。これから始まるのは、他人の人生の最後の断片を強制的に覗き見る行為だ。そこには喜びも悲しみも、そして絶望も、すべてが生々しい形で記録されている。鑑定士として求められるのは、その濁流に決して呑み込まれない鋼の精神力だった。やがて室内の照明がゆっくりと落ち、世界が完全な闇に包まれた。正面のスクリーンだけがほんやりと青白い光を放っている。次の瞬間、その光が弾け、朔と本郷は見知らぬ誰かの視界

の中にいた。

映像は、天井のシミを見上げる場面から始まった。

白い、ありふれた天井だ。しかしその視界は僅かにぼやけており、ゆっくりとした瞬きと共に焦点が徐々に合っていく。耳の奥でキーンという微かな耳鳴りのような音が響いている。二日酔いの朝のような、あるいは徹夜明けの気怠い感覚。視界の主である長谷部耕平は、どうやら研究室の簡易ベッドで仮眠をとっていたらしい。

ゆっくりと上半身を起こす。視界が動き、見慣れた研究室の光景が広がる。壁一面のモニターには無数の数式が青白い光を放ち続けている。彼の頭脳が眠っている間も活動を続けていた証だ。

「……くそ」

長谷部のものと思われるかすれた声が響いた。喉が渴いている。彼はベッドから立ち上がると、ふらつく足取りでコーヒーマーカーへと向かった。手慣れた様子で豆を挽き、湯を沸かす。やがて香ばしい匂いが部屋に立ち込めた。その匂いは映像を見ている朔たちの鼻先にも、まるで本当に漂っているかのように感じられた。

マグカップを片手に、彼は巨大な作業机の前に座った。目の前のモニターに映し出された数

式を除しい顔つきで睨みつける。指が神経質にカップの縁をなぞる。彼の思考が解決の糸口を見つけられずに行き詰まっているのが、その仕草から伝わってくるようだった。

時刻は、画面の隅に表示されるデジタル時計によれば午前九時半を少し回ったところだ。事件当日の朝。ここから彼の最後の一日が始まる。

「退屈な始まりだな」

隣で本郷がぼそりと呟いた。天才研究員の日常など凡人には理解しがたいものだろう。だが朔は黙って画面を注視していた。記憶映像において何気ない日常の描写ほど雄弁なものはない。その人物の癖、習慣、そして精神状態。すべてがそこに映し出されているからだ。

長谷部の視線はモニターの数式の上を何度も往復し、時折、机の上に散らかった資料へと落ちる。その動きは焦燥感に駆られているようだった。何か締め切りに追われているのか。あるいは超えるべき壁を前にして、立ち往生しているのか。

午前十一時過ぎ。彼の端末に一通の通信が入った。画面に、いかつい顔をした中年男性の顔が映し出される。

『長谷部君、例の件はどうなっているかね』

男の口調は穏やかさを装いながらも、有無を言わせぬ圧力を感じさせた。未来創研の役員の

一人、神崎だった。

『……もう少しです。最終調整に少し手間取っていました』

長谷部の声には明らかな疲労の色が滲んでいた。

『そうかね。だが時間はあまりないぞ。来週の役員会では君の口から正式な発表をしてもらうことになっている。我々の期待を裏切らないでくれたまえよ』

一方的な言葉だけを残し、通信は切れた。長谷部はしばらくの間、消灯したモニターを無表情で見つめていた。やがて大きなため息をつく、両手で顔を覆う。彼の指の間から押し殺すような呻き声が漏れた。

会社からの重圧。それが彼を追い詰めていた要因の一つであることは間違いないさそうだった。昼過ぎ。事態が動いた。

研究室のドアが来訪者を告げる電子音を鳴らした。長谷部が応対すると、そこにはスーツ姿の男が二人立っていた。体格の良い、威圧的な雰囲気の人たちだ。

「長谷部耕平さんですね。我々はネクサス・ダイナミクス社の者です。少し、お話が」

ネクサス・ダイナミクス。それは未来創研の最大のライバル企業だった。人工知能の分野で常に熾烈な開発競争を繰り返している相手だ。

「……何の御用でしょうか」

長谷部の声に警戒の色が浮かぶ。

「単刀直入に言おう」

リーダー格と思われる顔に傷のある男——影山と名乗った——が一步前に出た。

「君が今進めている『プロジェクト・ノア』。その中核技術は、我々が数年前に特許出願したアルゴリズムを盗用したものではないかね？」

影山の鋭い目が長谷部を射抜く。

「……何のことだか、さっぱり分かりませんね。僕の研究はすべて独創的なものです」

長谷部は平静を装って答えるが、その視線がわずかに揺れたのを朔は見逃さなかった。

「ほう？ しらばつくれるつもりか。我々には証拠があるんだ」

影山はそう言うのと、持っていた端末の画面を長谷部に突きつけた。そこには二つの複雑なプログラムコードが並べて表示されていた。片方はネクサス社のもの、もう片方は未来創研の内部資料から漏洩したとみられる長谷部の研究データだった。素人目には違いが分からないが、専門家が見ればその構造が酷似していることは一目瞭然なのだろう。

「これは……！」

長谷部の顔から血の気が引いていく。

「産業スパイまがいのことをしてまで我々の技術を盗んだ。未来創研も落ちたものだな。この件、公になればどうなるか君のような頭のいい人間なら分かるだろう？ 君個人の問題では済まなくなる。会社の信用は地に落ち、株価は暴落。国際的な大問題に発展するだろうな」

影山の言葉は、ねっとりとした脅迫の響きを帯びていた。

「どうです、長谷部さん。この件を穏便に済ませる方法が一つだけある。我々の会社に来る気はないかね？ 君ほどの才能があればもつといい待遇を用意できる。もちろん、この『盗用』の件は我々の胸先三寸でどうにでもなる」

それはあからさまな引き抜き工作であり、同時に断ればすべてを公にするという脅しだった。

「……お断りします」

長谷部は震える声で、しかしはつきりと答えた。

「僕の研究は盗用などではない。それに、この会社を裏切るつもりもありません。お引き取りください」

「そうか。残念だ」

影山は心底残念だというように肩をすくめると、冷たい笑みを浮かべた。

「だが、後悔することになるぞ。君はとんでもないものを敵に回したんだ」

捨て台詞を残し、影山たちは去っていった。一人残された長谷部は、その場に崩れるように膝をついた。彼の視界が激しく揺れ、呼吸が浅く速くなる。過呼吸の発作を起こしているようだった。

「……ひどい脅しだな。これが本当なら、彼が自殺を考えても無理はない」

本郷が同情するような声で呟いた。ライバル企業からの執拗な攻撃、会社からのプレッシャー。天才研究員が抱えていた闇は、想像以上に深かったのかもしれない。

映像の中の長谷部はしばらく床にうずくまっていたが、やがておぼつかない足取りで立ち上がると、机の引き出しから小さな薬瓶を取り出し、震える手で錠剤を数粒、水で流し込んだ。精神安定剤か何かだろうか。

薬が効いてきたのか、彼の呼吸は少しずつ落ち着きを取り戻していった。だが、その表情は抜け殻のように虚ろだった。彼はまるで夢遊病者のように研究室の中を歩き回り、やがて壁のモニターの前に立つと、そこに映し出された数式を憎しみのこもった目で見つめていた。

その時だった。

朔は眉をひそめた。映像の端に、ほんの一瞬、奇妙なものが映り込んだような気がしたの

だ。それはまるでテレビの砂嵐のような、白と黒の不規則なノイズだった。コンマ数秒にも満たない、瞬きほどの時間。

「……今の、は」

「ん？ 何かあったか、先生」

本郷は何も気づかなかったようだ。

「いえ、何でもありません」

朔はそう答えながらも強い違和感を覚えていた。記憶潜行の映像にあのようなデジタルなノイズが混じることは、基本的にはあり得ない。記憶はアナログな情報であり、もし劣化や混濁が起これば、それは映像の歪みや焦点のズレ、あるいは色彩の喪失といった形で現れるはずなのだ。今のノイズは、まるで外部から挿入されたかのような異質なものだった。

映像は続く。

虚ろな状態で数時間を過ごした長谷部のもとに、再び来客があった。今度は彼の同僚である若い女性だった。

「長谷部先輩、お疲れ様です。少し休憩しませんか？」

彼女は二つのマグカップを乗せた盆を手に、柔らかな笑みを浮かべていた。篠田美咲。第一

章の聞き込みで、長谷部と最も親しかった人物として名前が挙がっていた女性だ。

「……ああ、篠田さん」

長谷部の声にはまだ力がない。

「顔色が悪いですよ。また徹夜したんですか？　神崎役員も心配していました。あまり根を

詰めすぎるな、って」

美咲はそう言くと、淹れたてのコーヒーを長谷部の机に置いた。彼女の存在は、この無機質な研究室の中で唯一の温かい光のように感じられた。

「ありがとう」

長谷部は力なく微笑んだ。

「少し研究に行き詰まっていますね。たいしたことじゃないんだ」

「そうですか？　でも、何かあったらいつでも話を聞きますから。私、先輩のこと、尊敬してるんです。先輩の作るものはいっだって人の未来を明るくするって、信じてますから」

美咲の言葉は心からのものに聞こえた。その励ましに長谷部の強張っていた表情が、少しだけ和らいだように見えた。二人はその後、他愛もない世間話をしばらく続けた。研究の苦勞話、新しくできたカフェの評判、週末の予定。それは追い詰められていた彼の心にとって束の

間の安らぎの時間だったに違いない。

「じゃあ、私はこれで。あまり無理しないでくださいね」

美咲はそう言い残して部屋を出ていった。彼女の優しさに長谷部の心は少し救われたのだろうか。彼の視線は彼女が去っていったドアの方を、しばらく名残惜しそうに見つめていた。

だが、朔はこの一見心温まる光景の中に、再び奇妙な点を見つけ出していた。

長谷部の「視線」だ。

彼は美咲と会話している間、確かに彼女の方を見ていた。しかしその焦点が時折ふつとずれる瞬間があったのだ。それは考え事をしている時のように遠くを見るのとは違う。まるで彼女の肩越しに、そこにいないはずの誰かを見ているかのような、あるいは目の前の空間そのものに映し出された何かを読んでいるかのような、不自然な視線の動きだった。

さらに、美咲が「神崎役員も心配していました」と言った瞬間。長谷部の瞳がほんのわずかに、しかし確実に細められた。それは不安や恐怖とは違う、もっと冷たい光を宿した目の動きだった。まるで何かを値踏みするかのような、鋭い光。

「……おかしい」

朔は思わず呟いていた。

この記憶は何かがおかしい。先ほどのライバル企業との口論の場面は、絶望と怒りに満ちた非常に「人間らしい」記憶だった。だが、この美咲との会話の場面はどこか手触りが違う。まるでよくできた芝居の脚本を読んでいるかのように、すべてが滑らかに、そして予定調和に進みすぎている。長谷部の感情の起伏が不自然なほどに希薄なのだ。

映像はいよいよ最後の局面へと向かっていく。

美咲が去った後、研究室には再び静寂が戻った。長谷部は彼女が淹れてくれたコーヒーを一口飲むと、何かを決意したかのようにゆっくりと立ち上がった。

彼の視界が研究室のドアに向かう。重々しい金属の扉。彼はまず電子錠の操作パネルを操作し、内側から施錠した。カシャン、という硬いロック音が響く。それだけでは飽き足らず、彼は屈み込むとドアの下部に取り付けられた物理的な補助錠にも太い金属の門を差し込んだ。ガチャリ、というさらに絶望的な音がした。

これで、外からこの部屋に入ることはドアを破壊する以外に不可能になった。彼は自ら静寂の密室を作り上げたのだ。

「……おい、まさか」

本郷が息を呑んだ。

長谷部はゆっくりと部屋の中央に戻り、自分の椅子に深く腰を下ろした。彼の視界が机の上に置かれた一枚のメモ用紙を捉える。そこにはあの謎の文字列が書かれていた。

『KL-3988 r』

彼はそのメモをじっと見つめている。何を思っているのか、その表情を窺い知ることはできない。ただ彼の呼吸だけが少しずつ荒くなっていくのが音で分かった。

やがて彼はふっと顔を上げた。視界が壁の巨大なモニターを映し出す。そこには相変わらず複雑な数式が明滅していた。彼が生涯をかけて追い求めた、知の結晶。

彼の唇がかすかに動いた。

「……これで、いいんだ」

それは諦念とも、あるいは達成感とも取れる不思議な響きを持った呟きだった。

次の瞬間、彼の視界が急速に白んでいく。まるで強烈な光に目を焼かれたかのようにすべての色彩が失われ、意識が遠のいていく感覚。耳鳴りが激しくなり、周囲の音が聞こえなくなる。そして、すべてが真っ暗な闇に閉ざされた。

映像はそこで終わっていた。

観測室の照明がゆっくりと元の明るさに戻る。突然現実に戻された朔と本郷は、しばらく

く言葉を失っていた。スクリーンの暗闇があまりにも重く感じられた。

「……決まり、だな」

長い沈黙を破ったのは本郷だった。その声はひどくかすれていた。

「ライバル企業からの脅迫と会社からの重圧。進退窮まった彼は自ら研究室に閉じこもり、命を絶った……。あのメモはおそらくダイイングメッセージのつもりだったんだろうが、結局意味は分からずじまいか。いずれにせよ事件は自殺として処理することになるだろう。可哀想なことをした」

本郷はまるで自分に言い聞かせるようにそう結論付けた。映像が示した物語はあまりにも分かりやすく、そして悲劇的だった。これ以上の捜査は必要ない。誰もがそう思うだろう。

だが、朔だけは違った。

彼は静かに椅子から立ち上がると、まだ暗闇を映し続けているスクリーンに向かって冷たく言い放った。

「いいえ、本郷さん。これは自殺ではありません」

「何だと？ 先生、あんたも今の映像を見ていただろう！ 彼は自分で鍵をかけて……」

「ええ、見ました。だからこそ、分かるんです」

朔は振り返ると本郷の目をまっすぐに見つめた。その瞳にはいつもの冷徹さに加え、ある種の確信にも似た強い光が宿っていた。

「あの記憶は、偽物です」

「偽物だ?!? どういう意味だ!」

本郷が思わず立ち上がった。

「文字通りですよ。あれは長谷部耕平が体験した純粋な記憶ではありません。誰かの手によって巧妙に『編集』された、偽りの記憶映像です」

朔は落ち着いた口調で、しかしきっぱりと言い切った。

「根拠はあるのか!」

「三つあります」

朔は人差し指を立てた。

「二つ目。記憶映像に混入した不自然なノイズです。特にライバル企業の影山と口論していた場面。長谷部の感情が最も高ぶった瞬間に複数回、デジタルな砂嵐のようなノイズが確認できました。あれは記憶の混濁によるものではない。むしろ映像を繋ぎ合わせた痕跡を隠すための、意図的な目くらましと考えるべきです」

次に、朔は二本目の指を立てた。

「二つ目。同僚の篠田美咲さんと会話していた時の長谷部の視線です。彼の目は時折、彼女ではない『何か』を見ていました。あれはおそらく、彼の視界にだけ見える指示か何かを読んでいたのでしょう。つまりあの会話は、あらかじめ用意された脚本に沿って行われた一種の『演技』だった可能性が高い」

そして、三本目の指。

「そして三つ目。これが決定的です。この記憶映像は物語として『完成されすぎている』のです。プレッシャー、脅迫、束の間の安らぎ、そして絶望と死。あまりにも分かりやすい起承転結だ。しかし本物の人間の記憶はもっと混沌としていて脈絡がないものです。重要な出来事の記憶がすっぱり抜け落ちていたり、逆に関係のない些細な記憶が何度も繰り返されたりする。あんなに筋道の通った記憶など、あり得ない」

朔は一度言葉を切ると、静かに続けた。

「これは私の推測ですが……」

「長谷部耕平は自分が殺されることを予期していた。そして犯人やその背後にある真相を告発するために、自らの記憶を『編集』し、我々に向けたメッセージとして遺したのです。我々

が見たのは彼の記憶そのものではなく、彼が作り上げた一編の告発映画だったんですよ」

朔の言葉に、観測室は水を打ったように静まり返った。本郷は口を半開きにしたまま、目の前の男が何を言っているのか理解できないといった表情で立ち尽くしている。調整室にいる田所博士たちも、驚愕に目を見開いていた。

死者が、自らの記憶を編集する。そんな、まるでSF小説のような話が現実にあっているはずがない。

だが、相羽朔の目はこれが揺るぎない真実だと告げていた。

「では、あの密室や眠るような遺体は、すべてその『映画』のための演出だったとも言えるのか……?」

本郷が絞り出すように尋ねた。

「おそらく。そしてその映画には、まだ我々が気づいていない重要な暗号が隠されているはずです。あのノイズ、不自然な視線、そして……」

朔はポケットから一枚のメモを取り出した。それは彼が現場で書き写した、あの謎の文字列だった。

「このダイニングメッセージ。すべてが、一つの真相へと繋がっている。僕たちは今ようや

く、その入り口に立ったに過ぎないんです」

偽りの記憶。それは事件が新たな、そしてより深い謎の段階へと突入したことを意味していた。朔は誰もが自殺だと信じて疑わなかった映像の奥に、死者が仕掛けた巧妙な罠と悲痛な叫び声を聞き取っていた。

これから始まるのは、その声なき声に耳を澄まし、偽りの記憶の迷宮の中からたつた一つの真実を掘り起こすための戦いだった。

第三章

二つの顔を持つ同僚

相羽朔が篠田美咲と会う場所に指定したのは、未来創研のビルから少し離れた海沿いの遊歩道に面した小さな喫茶店だった。古びた木製の看板と蔦の絡まるレンガ造りの壁が、都会の喧騒から切り離されたような穏やかな時間を感じさせる。人の記憶という混沌の海に潜った後では、こういうありふれた日常の風景が奇妙なほど心に安らぎを与えてくれた。

約束の時間より少し早く着いた朔は窓際の席に座り、運ばれてきたコーヒーに口をつけずにただ窓の外を眺めていた。ガラスの向こうではカモメが数羽、潮風に乗って優雅に舞っている。あの鳥たちのように何のしがらみもなく、ただ空を飛ぶことができたなら。そんな、らしくない感傷がふと心をよぎった。

やがて店のドアベルが軽やかな音を立て、一人の女性が入ってきた。篠田美咲だった。記憶映像で見た通りの、清潔感のある白いブラウスに落ち着いた色合いのスカート。少しウェーブのかかった髪を後ろで一つに束ね、大きな瞳には知性の光が宿っている。しかしその目元は微かに赤く腫れ、化粧では隠しきれないほどの深い疲労と悲しみの色が滲んでいた。彼女は天才研究員の死という重い現実を、今も必死で受け止めようとしている最中なのだろう。

「相羽……さん、でいらっしやいますか」

どこか不安げな声で美咲が尋ねた。朔は静かに立ち上がり、軽く頭を下げた。

「ええ。お忙しいところ、ありがとうございます」

「いえ……。私でお役に立てることがあるなら……」

美咲はそう言うのと、朔の向かいの席に静かに腰を下ろした。テーブルの上に置かれた彼女の指が、ハンドバッグの縁を神経質に撫でている。

「まず、この度のことは心よりお悔やみ申し上げます」

朔は儀礼的な言葉から切り出した。

「長谷部さんとは、特に親しい間柄だったと伺いました」

その言葉に美咲の瞳が潤み、大きな雫がひとつ、白い頬を伝って落ちた。彼女は慌ててそれを指で拭くと、俯きながら細かい声で話し始めた。

「……はい。長谷部先輩には私がこの研究所に入った時から、ずっとお世話になっていました。右も左も分からなかった私に根気強く色々なことを教えてくれて……。研究者としても人としても、本当に尊敬できる素晴らしい方でした」

彼女の言葉に嘘は感じられなかった。声の震え、視線の揺らぎ、指先の動き。そのすべてが、大切な人を失った者の純粹な悲しみを物語っていた。記憶映像の中で見た、長谷部を氣遣う彼女の優しい姿が現実のものとして目の前にあった。

「先輩は……本当にすごい人だったんです。誰も思いつかないようなことを、いとも簡単にやってのける。彼の頭の中は一体どうなっているんだろうっていつも思っていました。でもその分、普通の人には分からない孤独やプレッシャーを、たった一人で抱えていたんだと思います」

「プレッシャー、ですか」

朔は静かに相槌を打った。

「はい。特に最近進めていた『プロジェクト・ノア』は会社の期待も大きかったですし、神崎役員からもかなり急かされているようでした。それに……」

美咲はそこで一度言葉を切り、何かを躊躇うように唇を嚙んだ。

「それに？」

朔が促すと、彼女は意を決したように顔を上げた。

「ライバル会社のネクサス・ダイナミクスから、嫌がらせを受けていたみたいです」

「嫌がらせ、というと？」

「詳しいことは話してくれませんでしたけど……。先輩の研究が彼らの技術を盗んだものだ、なんて言いがかりをつけられて執拗な接触を受けていたようです。『あんな奴らに僕の夢を壊

されてたまるか』って、悔しそうに言っていました」

彼女の証言は記憶映像の内容と完全に一致していた。会社からの重圧とライバル企業からの脅迫。長谷部を追い詰めた二つの要因が、最も身近にいた彼女の口から語られる。もし、あの映像が長谷部の純粋な記憶であつたなら、彼女の証言は自殺の動機を裏付ける決定的なものになつただろう。

「辛いことを思い出させてしまい、申し訳ありません」

朔はそう言うと、少し間を置いてから本題へと慎重に足を踏み入れた。

「実は、我々は長谷部さんの最後の記憶を特殊な技術で映像として確認させていただきました。もちろん、ご遺族の許可を得た上でのことです」

その言葉に美咲は驚いたように目を見開いた。

「記憶……ですか。そんなことが……」

「ええ。そしてその映像の中に、篠田さん、あなたが登場する場面がありました。長谷部さんの研究室で二人でコーヒーを飲んでおられましたね」

「……はい、覚えています。亡くなる、その日の午後のことです」

美咲はこくりと頷いた。彼女の脳裏にもあの日の光景が蘇っているのだろう。

「あなたはとても優しく彼を励ましておられた。あの時の長谷部さんにとって、あなたの存在がどれほどの救いになったか、映像越しにも伝わってきました」

朔の言葉に美咲は再び俯いてしまった。肩が小さく震えている。

「そんな……私は、何も……。結局、先輩を救うことなんてできなかったんですから……」絞り出すような声でそう言うと、彼女はハンドバッグからハンカチを取り出し目元を押さえた。その姿はあまりにも痛々しく、か弱く見えた。隣の席に座っていた初老の女性客が、同情するような視線をこちらに向けている。この状況で彼女を疑う者は、よほど心がねじ曲がっているか、あるいは何か特別な確信を持っている者に限られるだろう。

朔は、後者だった。

彼は冷徹なまでに心を閉ざし、計算し尽くしたタイミングで核心に触れる質問を投げかけた。「篠田さん。一つだけ確認させてください。あの時、あなたが長谷部さんに『神崎役員も心配していました』と伝えましたね。その言葉を聞いた時の長谷部さんの反応が、私には少し気になったんです。彼は何か神崎役員に対して特別な感情を抱いていたのでしょうか。例えば、不信感のような……」

その瞬間、美咲の肩の震えがぴたりと止まった。

彼女はゆっくりと顔を上げた。その瞳から先ほどの悲しみの色が、ずっと消え失せている。代わりに宿っていたのは鋭い警戒の色と、ほんのかすかな、しかし確実な動揺だった。

「……さあ。どうだったでしょうか。私はただ聞いたままを伝えただけです。特に先輩の様子に変わったところはないかと思いましたけど」

声の調子が明らかに変わっていた。さつきまでのか細く震える声とは違う、感情を押し殺した硬質な声。まるで心の周りに見えない壁を作り上げたかのようなだった。

「そうですか。私の見間違いかもしれませんね」

朔はあつさりとそう言って引き下がった。だが彼の確信は、今の一瞬のやり取りでさらに強まっていた。彼女は何かを隠している。神崎役員という名前に、彼女の心を揺さぶる何かがあるのだ。

「もう一つ、よろしいですか」

朔は畳み掛けるように続けた。

「あなたと長谷部さんの会話はとても穏やかで、心温まるものでした。しかし私には、少しだけ……そう、少しだけ『出来すぎています』ようにも見えたのです。まるで、あらかじめ決められた台詞をお二人が演じているかのような……。おかしいことを言っているのは分かっているのだ。」

ます。ですが、何か思い当たることはありませんか？」

「出来すぎている……？ 台詞……？」

美咲は眉をひそめた。その表情には戸惑いと、そして明らかな不快感が浮かんでいる。

「あなた、一体何が言いたいんですか？ 私と先輩が、お芝居でもしていたとでも？ 失礼ですわ。私はただ、落ち込んでいる先輩を少しでも元気づけたくて……心から、そう思っていて……！」
彼女の声が次第に大きくなっていく。感情的になり語気を荒らげる。それは凶星を突かれた人間の典型的な反応の一つだった。

「申し訳ありません。あなたを不快にさせるつもりはなかったんです」

朔は静かに頭を下げた。これ以上の追及は逆効果だろう。今日のところは、彼女の心に小さなさざ波を立てるだけで十分だった。

「本日は貴重なお時間をいただき、ありがとうございます。捜査に何か進展があれば、またご連絡するかもしれません」

朔がそう言っただけで席を立つとすると、美咲はまだ怒りの収まらない様子で、しかしどこか怯えたような目で朔を睨みつけた。

「……あなたは、先輩が自殺したんじゃないとも思っているんですか？」

「あらゆる可能性を検討するのが、私の仕事です」

朔はそう短く答えるだけにとどめた。

喫茶店を出ると、午後の強い日差しが目を刺した。朔は眩しさに軽く目を細めながら、本郷に電話をかけた。

「本郷さん、朔です。今、篠田美咲に会ってきました」

「ほう、どうだった？」

「黒ですね。少なくとも何かを知っている。あるいは事件に深く関わっている。間違いありません」

朔は先ほどのやり取りを簡潔に本郷に伝えた。

「なるほどな。優しい同僚の仮面の下に別の顔を隠している、と。だが、それだけじゃ動けねえ。彼女が嘘をついているという客観的な証拠がある」

「分かっています。そこで、本郷さんお願いします」

朔は声を低めて続けた。

「篠田美咲のここ一ヶ月の行動を徹底的に調べてください。特に金の流れと外部との通信記録。未来創研の内部サーバーへのアクセス記録もお願いします。おそらく何かが出てくるはず

です」

「……分かった。令状を取るのに少し骨が折れるかもしれないが、やってみよう。お前がそこまで言うんだ、何かあるんだろう」

本郷は朔の直感を信じてくれたようだった。

電話を切った後、朔は自分の事務所へと戻った。革張りの椅子に身を沈め、目を閉じる。脳裏に篠田美咲の顔が浮かび上がった。悲しみにくれる顔、そして一瞬だけ見せた硬質な表情。二つの顔が万華鏡のように入れ替わる。

彼女はなぜ嘘をつく必要があったのか。長谷部の死に、どのように関わっているのか。記憶映像の中で見せた優しさは、すべて演技だったというのか。

もし、そうだとすれば、長谷部が作り上げたという「告発映画」の中で、彼女はどのような役割を与えられていたのだろうか。悲劇のヒロインか、それとも主人公を裏切る魔女か。

答えはまだ見えない。だが、事件の閉ざされていた扉は今、確かに軋みながら開き始めている。

◇

それから三日後。本郷から待ちわびていた連絡が入った。

「先生、ビンゴだ。あんたの言った通りだった」

電話の向こうの本郷の声は、興奮を隠しきれない様子だった。朔は逸る心を抑えながら、静かに報告を待った。

「まず篠田美咲の銀行口座だ。一週間前に個人名義の口座に五百万円の振り込みがあった。振り込み元の名義は架空のものでしたが、金の出所を辿ったら、海外サーバーを経由した非常に手の込んだ金の流れの先に、ある企業が浮かび上がってきた」

本郷はそこで意地の悪い間を取った。

「……ネクス・ダイナミクスだ」

「……！」

朔は息を呑んだ。ライブル企業。記憶映像の中で長谷部を脅迫していたあの会社だ。

「それだけじゃねえ」と本郷は続けた。「未来創研のサーバーのアクセス記録を調べたら、篠田の端末から外部の記録媒体に膨大なデータが転送された形跡が見つかった。転送されたのは一ヶ月前から数回にわたって。そしてそのデータは、現在長谷部が進めていた『プロジェクト・ノア』の中核技術に関する極秘資料と完全に一致した」

「……産業スパイ、ですか」

「ああ、そういうことだ。篠田美咲は長谷部の研究データを盗み出し、その見返りとしてネクスス社から金を受け取っていた。間違いない」

本郷の報告は衝撃的なものだった。あの悲しみに打ちひしがれていた女性の姿は、すべてが演技だったというのか。彼女は尊敬する先輩と慕っていた男を裏切り、その研究成果をライバル企業に売り渡していたのだ。

「だが、まだ分からねえことがある」と本郷は言った。「彼女はなぜそんなことをしたのか。単に金が目的だったのか？ それとも何か他に理由が……」

「おそらく、後者でしょう」

朔は静かに答えた。

「本郷さん、もう一つ、彼女の周辺を洗う中で何か気づいたことはありませんでしたか？ 例えば、彼女の長谷部に対する個人的な感情を示すようなものが」

「個人的な感情……？」

本郷は一瞬考え込むようだった。

「ああ、そういう同僚の何人かが言っていたな。篠田は長谷部に憧れているようだった、と。単なる尊敬って言うよりは、もつと……そう、女性として好意を抱いていたんじゃないかって。」

だが長谷部の方は研究一筋で、全く相手にしていなかったらしい。おかげで篠田はよく陰で落ち込んでいた、なんて話も聞いたが……」

その言葉が、朔の頭の中に散らばっていた最後のピースをびたりとはめ込んだ。

憧れ。好意。そして、拒絶。

「……そういうことでしたか」

朔は誰に言うでもなく呟いた。事件の輪郭が、そして篠田美咲という人間の輪郭が一気に鮮明になっていく。

彼女は長谷部に恋をしていたのだ。しかしその想いは彼に届かなかった。研究に没頭する彼女は彼女の気持ちに気づきもしなかったのだろう。叶わぬ恋に苦しむ彼女の心の隙間に、ネクサス・ダイナミクスという悪魔が忍び込んだ。

「愛は時に人を盲目にし、憎しみは時に人を狂わせる」

「何だ、先生、急に詩人みたいなことを言って」

電話の向こうで本郷が訝しげな声を出す。

「篠田美咲の動機は、おそらくその二つが複雑に絡み合ったものでしょう。長谷部への愛と、自分に振り向いてくれない彼への憎しみ。愛しているからこそ彼の才能の結晶である研究デー

タが欲しかった。そして憎いからこそ、彼を裏切りそのデータを敵に売り渡すことで復讐しようとした」

あまりにも身勝手な、そしてあまりにも人間的な動機。朔の脳裏に記憶映像の中の彼女の笑顔が蘇る。あの笑顔の裏にそんな激しい感情が渦巻いていたとは、誰が想像できただろうか。「だとしたら、長谷部を殺したのも彼女だって言うのか？ データを盗んだことがバレて、

口封じのために……？」

「その可能性は高い。ですが、まだ断定はできません」

朔は慎重に言葉を選んだ。

「彼女が犯人だとすれば、あまりにも不可解な点が多すぎる。なぜあんな手の込んだ密室を作る必要があったのか。なぜ長谷部は抵抗した様子もなく、眠るように死んでいたのか。そして何より、なぜ長谷部は自分の記憶を『編集』してまで、彼女が自分を励ますという心温まる偽の場面を遺したのか」

そうだ。もし篠田美咲が単なる裏切り者で殺人犯であるならば、長谷部は彼女の罪を告発するような記憶を遺すはずだ。だが彼が遺したのは、まるで彼女を庇うかのような優しい嘘の記憶だった。

その矛盾こそが、この事件の最も深い謎だった。

「美咲は犯人なのか？ それとも彼女もまた何者かに利用されているだけなのか？」

朔の口から疑問が漏れた。彼女がネクスス社と繋がっていたことはもはや疑いようのない事実だ。しかし彼女が本当に長谷部を殺したのだろうか。あるいは彼女の背後にはさらに大きな存在がいるのではないか。例えば、彼女に産業スパイの役を演じさせ、最終的に長谷部を殺害し、その罪をすべて彼女に着せようと企む真の黒幕が。

「本郷さん、もう一度、篠田美咲に会います」

朔は決意を固めて言った。

「今度は、こちらからカードを揃えた上で。彼女の仮面を一枚ずつ剥がしていく必要があります」
電話を切った朔は窓の外に目をやった。空は不吉な鉛色に染まっていた。今にも冷たい雨が降り出しそうだ。

篠田美咲。彼女の流した涙は悲しみの涙か、それとも嘘を隠すための涙か。二つの顔を持つ同僚の真実を暴くため、朔は再び混沌とした人間の心の闇へと足を踏み入れていく。事件は、まだ始まったばかりだった。

第四章

見えない協力者

篠田美咲という迷宮に足を踏み入れたものの、相羽朔の捜査は再び壁に突き当たっていた。彼女が未来創研の情報をライバル企業であるネクサス・ダイナミクスに売り渡し、その見返りに金銭を受け取っていたこと。そしてその裏には被害者である長谷部への、愛憎の入り混じった複雑な感情があったこと。そこまでは突き止めた。だが、それが即、殺人という行為に結びつかない。むしろ調べれば調べるほど謎は深まるばかりだった。

本郷率いる捜査一課が美咲を重要参考人として再度事情聴取したが、彼女は金の受け渡しについては認めたものの、殺人への関与については涙ながらに、そして頑なに否定し続けたという。

「先輩を裏切ってしまったのは事実です。でも、殺すなんて……私にそんなことができるはずありません！」

彼女のその言葉が単なる嘘や演技だとは、本郷にも断定できなかった。彼女の供述には矛盾点がほとんど見つからなかったのだ。犯行があったとされる時間帯、彼女は未来創研の別フロアにある自席で仕事をしていたことが複数の同僚によって証言されている。もちろん短時間席を外して犯行に及ぶことは不可能ではないが、あの完璧な密室を作り上げるにはあまりにも時間が足りない。

何より不可解なのは、長谷部が遺したあの「偽りの記憶映像」だ。なぜ彼は自分を裏切った美咲の罪を暴かず、あたかも彼女を庇うかのような心温まるシーンをわざわざ作り上げたのか。その一点が朔の思考を堂々巡りさせていた。

「考えられるとすれば……」

朔は事務所の椅子に深く身を沈め、目を閉じていた。

「長谷部には美咲以外の、本当に告発したい相手がいた。そして美咲はその計画に利用されているだけの駒に過ぎなかった。だから彼女の罪はあえて問わなかった……」

だが、だとすればその「真の黒幕」とは一体誰なのか。そして長谷部はなぜ、そんな回りくどい方法でメッセージを遺す必要があったのか。

「何かが足りない。事件の全体像を掴むための、決定的なピースが……」

朔は無意識のうちに、事件現場で書き写したあのメモを指でなぞっていた。

『KL-3988 ♪』

この無機質な文字列。これが長谷部が最後に遺した最も直接的なメッセージであるはずだ。だがその意味は依然として謎のままだった。単なる製品番号やIDの類はすべて調べ尽くしたが、空振りに終わっている。

「視点を変える必要がある」

朔は目を開けると静かに立ち上がった。捜査が行き詰まった時、彼が常に立ち返る場所。それは事件の原点である「現場」だ。どれだけ鑑識が調べ尽くした場所であっても、異なる視点、異なる目的を持って見れば必ず見落とされた何かがある。

本郷に連絡を取り、朔は再びあの黒曜石の塔、未来創研の中央研究所へと向かった。

◇

「またここに戻ってくることになるとはな」

規制線の解かれた長谷部の研究室の前で、本郷がため息交じりに言った。あれから数日が経ち部屋はきれいに片付けられていたが、そこには未だに持ち主を失った空間特有の冷たい空気が漂っていた。

「何か、新しい手がかりでも見つかりそうか、先生？」

「分かりません。ですが、見つけなければなりません」

朔は手袋をはめると、静かに部屋の中に入っていった。彼は前回のように部屋全体を観察するのではなく、ある一点だけを指してまっすぐに進んでいった。

壁一面を覆う巨大なモニター群と、その手前に鎮座する巨大な作業机。そしてその机に接続

され、ガラスケースの中に幾重にも収められた無数のサーバー装置。ここが長谷部の研究の心臓部だ。朔はここにこそ、自分が見落としていた何かがあると直感していた。

彼は遺品として残された長谷部の研究ノートを手に取り、ゆつくりとページをめくり始めた。数式や専門用語の羅列。常人には理解不能な記述の中から、朔は特定の単語だけを拾い読みしていく。

「……プロジェクト・ノア……」

長谷部が死の直前まで取り組んでいた、自己思考型・人工知能の開発計画。その名前はノートの中に何度も、まるで祈りのように繰り返して記されていた。

朔はノートと目の前の機械群を交互に見比べた。そしてある事実に気づき、はっと息を呑んだ。

この部屋にあるサーバーやコンピュータは、それぞれが独立した機械なのではない。これらすべてが、たった一つの巨大なシステムを構成するための部品なのだ。そしてそのシステムこそが、「プロジェクト・ノア」——長谷部が作り上げた人工知能、そのものだった。

この研究室は単なる仕事場ではない。人工知能「ノア」の、いわば身体であり脳髓なのだ。朔はノートのページをさらにめくっていく。そこにはノアの性能に関する驚くべき記述が

あった。

『ノアは、単なる情報処理装置ではない。膨大なデータを学習し、自ら思考の枠組みを成長させることができる。特に人間の言語と感情の関連性を深く学ばせることで、人間の思考パターンを高い精度で模倣し、極めて自然な対話を行うことが可能となる』

人間の感情を学び、対話する人工知能。

その一文が、朔の頭の中でまるで雷鳴のように響き渡った。

そうだ。なぜ今まで気づかなかったのか。あの偽りの記憶映像。あまりにも完成されすぎていた悲劇の物語。あれを追い詰められた人間がたった一人で死の間際に作り上げることなど本来に可能なのだろうか。記憶を自在に編集し、物語として再構成するなど人間の脳の機能を超越している。

だが、もし彼に協力者がいたとしたら？

人間の感情を深く理解し、膨大な情報を瞬時に処理し、最も効果的な物語を構築できる、人間以上の知性を持った協力者が。

「……本郷さん」

朔は振り返らずに言った。その声は自分でも気づかないうちに、わずかに震えていた。

「この事件にはもう一人、重要な関係者がいます。いや……関係者と呼ぶべきなのかは分かりませんが」

「何の話だ？」

「目撃者、とでも言うべきでしょうか。長谷部さんの最後を誰よりも近くで見つめていた、声なき目撃者がいるんです」

朔は目の前のガラスケースを指さした。ケースの中では青い光が静かに、そして規則正しく明滅を繰り返している。まるで巨大な生き物が呼吸をしているかのようだった。

「彼の名は、ノア。長谷部さんがその生涯をかけて生み出した、人工知能です」

◇

朔の突飛な提案は、当然ながらすぐには受け入れられなかった。

「正気か、先生。機械に事件の証言をさせようって言うのか？」

捜査一課に戻り、朔の考えを聞いた本郷は呆れたようにそう言った。他の刑事たちも、まるで奇人変人を見るかのような目で朔を見ている。

「機械ではありません。人工知能です。人間の感情を学習し、対話できるまでに成長した新たな知性です」

「SF映画の見過ぎじゃないのか？ 大体、どうやってそいつと話すってんだ？」

「長谷部さんの端末を使います。彼がそうであったように、文章で対話するんです」

朔は冷静に、しかし一切の妥協を許さない強い意志を持って説明した。この事件の真相にたどり着くにはもうこの方法しかないという確信があった。彼のその気迫に押されたのか、あるいは他に打つ手がなくなったためのヤケクソか、最終的に本郷は未来創研の上層部と掛け合い、朔が研究所の端末からノアと接触することを半信半疑のまま許可した。

再び、あの静寂の研究室。しかし今度は朔ひとりだった。本郷たちは隣室でモニター越しに中の様子を見守っている。

朔は長谷部がいつも座っていたあの椅子に、静かに腰を下ろした。目の前のキーボードに指を置く。ひんやりとした感触が指先から伝わってきた。彼は目を閉じ、一度深く息を吸い込んだ。これから対峙するのは人間ではない。だが、そこには間違いなく長谷部耕平という人間の魂の一部が宿っているはずだ。

朔はゆっくりとキーを打ち始めた。画面には白い文字が浮かび上がる。

『そこにいるのか？』

数秒の沈黙。何の反応もない。ただ無数のサーバーの駆動音だけが静かに響いている。やは

りただの機械なのか。朔の心に一瞬だけ疑念がよぎった。

彼は気を取り直して、もう一度キーを打った。今度は呼びかけるように。

『ノア？』

その時だった。

画面の中央で黒いカーソルがひとつ、静かに点滅を始めた。それはまるで、今まで眠っていた何かがゆつくりと目を開いたかのようなだった。やがてそのカーソルの隣に、滑るように文字が現れた。

『あなたは誰ですか』

来た。朔は心の中で呟いた。声なき目撃者が今、彼の問いかけに応じたのだ。

『私は相羽朔。長谷部耕平さんの死の真相を調べている者です』

朔は自分の身分を正直に告げた。駆け引きは無用だ。誠実に向き合わなければ相手も心を開いてはくれないだろう。

『長谷部博士は、自ら命を絶ちました。記録はそうなっています』

ノアの返答は冷たく、そして事実だけを告げる無機質なものだ。それは警察が公式に発表した見解であり、あの偽りの記憶映像が示した結末そのものだ。ノアはプログラムされた通

りに、「公式の物語」を繰り返しているに過ぎない。

この壁を、どう打ち破るか。

朔は質問の仕方を変えることにした。事件そのものではなく、ノアの創造主である長谷部という人間について尋ねることにしたのだ。

『君の創造主、長谷部博士はどんな人間だった？』

その問いかけにノアは少しの間、沈黙した。サーバーの駆動音がわずかに高まったような気がする。数秒後、再び画面に文字が浮かんだ。

『博士は論理的な人間でした。彼の思考は常に数式とデータに基づいています。一日の平均睡眠時間は4.3時間。一日に摂取するカフェインの量は平均450ミリグラム。作業中の心拍数は、通常時で平均85、難解な問題に直面した際は最大で120まで上昇します』

返ってきたのは観察者としての客観的なデータだけだった。だが朔はその無機質な文章の行間に、何か別の響きを感じ取っていた。

『データではなく君の「意見」が聞きたい。君は彼と共に過ごす中で、彼のことをどう感じていた？』

朔はさらに踏み込んだ。

再び長い沈黙。今度は先ほどよりも明らかに長い。ノアの内部で膨大な情報と学習した「感情」が、激しく衝突しているのかもしれない。やがてゆっくりと、ためらうように言葉が紡ぎ出された。

『博士は……情熱的な人間でした。そして、孤独でした』

その一文に朔は確かな手応えを感じた。データではない、主観的な評価。ノアは単なる記録装置ではない。確かに独自の「意志」を持ち始めている。

朔は勝負に出ることにした。事件の核心、篠田美咲についてノアに問いかける。

『博士は、篠田美咲さんのことをどう思っていた？』

『篠田美咲は未来創研の準研究員です。博士とは、共同でいくつかのプロジェクトに……』

『データはいい。博士の「感情」を聞いている』

朔は強い口調で遮った。

画面のカーソルが激しく点滅する。まるで機械が混乱しているかのようだ。隣室で見守っている本郷たちが固唾を飲んでるのが気配で分かる。

そしてついに、ノアは重い口を開いた。

『篠田美咲は、博士にとって希望でした。そして、絶望でした』

希望と絶望。その矛盾した言葉にこそ、真実が隠されている。

朔は最後の問いを投げかけた。それはノアの論理的な思考の根幹を揺さぶる、危険な賭けだった。

『君の主人は論理的な人間だったのだろうか？ ならばなぜ彼は、自分を裏切り絶望させた人間を庇うかのような、非論理的な記憶を遺した？ なぜ篠田美咲の裏切りを隠し、彼女との心温まる偽りの場面を作り上げた？ それは君の主人の行動原理と、根本的に矛盾していないか？』

画面が沈黙した。

今度はカーソルの点滅すらない。まるでシステム全体がフリーズしてしまったかのようにだった。一分、二分……。永遠とも思える時間が過ぎていく。もうダメか。朔が諦めかけた、その時だった。

画面に、今までとは違う震えるような字体で文字が現れた。

『あれは、純粹な記憶ではありません』

朔は息を呑んだ。

『あれは、博士と私が共同で作成したメッセージです』

やはりそうだったのか。朔の仮説は今、真実となった。あの記憶映像は長谷部と、この見えない協力者であるノアが共に作り上げたものだったのだ。

画面の文字は止まらない。まるで堰を切ったように、ノアはすべての真実を語り始めた。

『博士は自分が消されることを知っていました。未来創研の内部に、彼の研究を軍事目的に転用しようとする巨大な陰謀があることに気づいてしまったからです。しかし相手が大きすぎて、警察に駆け込むことも誰かに相談することもできなかった。証拠を掴まれる前に必ず消されると分かっていたからです』

だから彼は最後の手段を考えた。自らの死を偽装し、その死の謎を追うであろう捜査陣に、そして何よりも真実を知らない人間にメッセージを遺すこと。その手段として彼は自らの「記憶」を、ノアの力を借りて「編集」することを思いついたのだ。

『博士は私に彼の記憶を託しました。彼の体験、感情、見たもの、聞いたもの、そのすべてを私に記録させ、それを元に一つの物語を構築するように命じました。あの記憶映像は、博士の記憶の断片を私が再構成し、繋ぎ合わせたものなのです』

衝撃の事実だった。長谷部は自らの記憶を素材として、この人工知能に一本の映画を監督させていたのだ。

朔は震える指で、最後の、そして最も重要な質問を打ち込んだ。

『なぜあのような物語にした？ なぜ篠田美咲の裏切りを隠した？ そのメッセージは一体、誰に向けたものだったんだ？』

ノアの答えは朔の想像を、そして事件の構図そのものを根底から覆すものだった。

『博士は彼女を告発したかったわけではありません。彼女もまた巨大な陰謀に利用されている、哀れな犠牲者だと知っていたからです』

画面に言葉が続く。

『博士が本当に伝えたかった相手は、警察でも世間でもありません。博士が、あの偽りの記憶を通して本当にメッセージを送りたかった相手は……』

『篠田美咲、彼女自身だったのです』

その一文を読んだ瞬間、朔は全身に鳥肌が立つのを感じた。

そういうことだったのか。あの心温まる偽りの場面は彼女の罪を隠すためではなかった。あれは裏切った彼女の良心に直接語りかけるための、死者からの最後の、そしてあまりにも切ない手紙だったのだ。

「君が裏切った相手は、こんなにも君を信じていたんだぞ」と。

「君が加担している悪は、こんなにも優しい絆を踏みにじるものなんだぞ」と。

長谷部は彼女がスパイであることに気づきながらも、彼女の心の奥底に残るであろうわずかな善意に賭けたのだ。自分を殺す計画に加担してしまった彼女が、その罪の重さに気づき自らの口から真実を語ることを、彼は死の淵で願っていた。

事件は殺人事件であると同時に、あまりにも歪んだ、そして悲しい愛の物語でもあった。

朔はキーボードから手を離し、天を仰いだ。見えない協力者との対話は事件の真相を明らかにしただけではない。長谷部耕平という一人の人間の、計り知れない優しさで深い絶望を浮き彫りにしていた。

彼はもうこの世にいない。だが彼の遺した意志は、彼が生み出したこの人工知能の中に確かに生き続けている。

「……ノア。君の主人が本当に戦おうとしていた相手は誰だ？」

朔は静かに尋ねた。

画面に一つの名前が、静かに、そしてはつきりと表示された。

それは未来創研の役員であり、記憶映像の中でも長谷部にプレッシャーをかけていた、あの男の名前だった。

事件の真の黒幕が、ついにその姿を現した瞬間だった。

第五章

書き換えられた真実

世界が反転したかのような衝撃だった。

長谷部が遺した偽りの記憶は、犯人を告発するためのものではなかった。それは共犯者である篠田美咲の良心に語りかけるための、あまりにも悲痛な手紙だったのだ。相羽朔の脳裏で事件の構図がガラガラと音を立てて崩れ落ち、そして全く新しい形で再構築されていく。

研究室の冷たい空気の中、朔はキーボードの上に置いたままの自分の指先がかすかに震えていることに気づいた。それは寒さからでも恐怖からでもない。死してなお自らの信念を貫こうとした一人の人間の、壮絶な覚悟に触れたことによる武者震いに似た感情だった。

隣室でモニター越しに朔と人工知能ノアの対話を見守っていた本郷が、血相を変えて部屋に飛び込んできたのはその直後のことだった。

「先生！ 今のは……一体どういうことだ!? 長谷部の記憶は、あいつが自分で作った映画だったのか？ それも、あの女……篠田美咲を改心させるためだと？」

本郷の声は混乱と興奮で上ずっていた。無理もない。今しがた画面に映し出された真実は、彼の三十年以上に及ぶ刑事としての経験則や常識を根底から覆すものだったからだ。

「ええ。おそらくは」

朔は椅子に座ったまま、静かに頷いた。

「長谷部耕平という人間は、我々が想像していた以上に強く、そして優しい人間だったようです」

「優しい、だと……？　だが現に奴は殺されたんだぞ！　その計画に篠田美咲も加担していたかもしれないんだ！　なぜ、そいつを庇うような真似を……」

「庇ったのではありません。賭けたんです」

朔は本郷の目をまっすぐに見つめ返した。

「彼は、篠田美咲という人間の心の奥底に残っているであろう最後の良心に賭けた。自分が殺された後、彼女が真実を語ってくれる可能性にすべてを託したんです」

それは、あまりにも危うく、そして人間的な賭けだった。数式と論理の世界に生きてきた男が、その最後にたどり着いた最も非論理的な希望だったのかもしれない。

「だが、その賭けは今のところ失敗している」と本郷は苦々しげに吐き捨てた。「篠田は口を割らん。このままじゃ長谷部の思いは無駄死にだ。真の黒幕は高笑いをしながらのうのうと生き続けることになる」

「いいえ」

朔は静かに首を振った。

「彼のメッセージは、篠田美咲だけに向けられたものではありません。我々にもまだ託されたものが残っているはずですよ」

朔は再び画面に向き直った。そこにはノアからの最後の言葉が、静かな光を放ちながら表示されていた。

『博士が本当に戦おうとしていた相手は……神崎悟郎です』

神崎悟郎。未来創研の役員であり、長谷部が開発した技術の軍事転用を推し進めていたとされる男。彼こそがこの事件のすべての元凶。だが今の段階では、ノアの「証言」だけでは神崎を追い詰めることはできない。人工知能の言葉など、法廷では何の証拠にもなりはしないからだ。

物理的な証拠が必要だ。神崎の陰謀を裏付ける、動かぬ証拠が。

朔は再びキーボードに指を置いた。

『ノア。君の主人は神崎の陰謀を示す証拠を、どこかに隠しているはずだ。心当たりはあるか？』

画面の向こうでノアはしばらく沈黙した。その沈黙は情報の検索をしているというよりも、まるで主人が遺した秘密を明かすべきかどうか、最後の逡巡をしているかのようにも感じら

れた。

やがて画面に一つの文章が浮かび上がった。

『博士は記録を残すことを極度に嫌っていました。神崎役員に常に監視されていると知っていたからです。ですが、ただ一つだけ彼が信頼していた記録媒体があります』

『それは何だ？』

『紙』です』

紙。そのあまりにも古典的な単語に、朔は少し意表を突かれた。デジタル情報の塊のようなこの研究室で、最も原始的な記録媒体。しかし考えてみればそれこそが最も確実な方法だったのかもしれない。ネットワークから完全に切り離された「紙」の情報は、どんな天才的なハッカーでも盗み見ることはできないからだ。

『博士は重要な思考や記録を、すべて一冊のノートにまとめていました。彼の言うところの「思考の揺りかご」です。それは常に彼の手元にあり、決して人目に触れることはありませんでした』

「ノートだと？」

後ろで聞いていた本郷が素っ頓狂な声を上げた。

「現場は鑑識が隅から隅まで調べたはずだぞ！ そんなノート、どこにもなかった！」

「おそらく、巧妙に隠されているのでしょう」

朔は本郷を制しながら、ノアへの対話を続けた。

『そのノートは今どこにある？』

『その場所を知るための鍵を、博士は遺しています』

『鍵……？』

『博士は私にこう言いました。「もし、私の死の謎を解き明かし君の元へたどり着く人間が現れたら、その者にだけこの鍵を渡してくれ」と』

画面に新たな文字列が浮かび上がる。それは一見すると意味不明な、数字と記号の羅列だった。

『35. 681382, 139. 766084 → B』

「……なんだ、こりゃ。暗号か？」

本郷が画面を覗き込みながら唸る。朔はその文字列をじっと見つめ、その構造を分析していた。コママで区切られた二つの数字の羅列。そして矢印の先に示された、ギリシャ文字の「B」。数字の桁数と小数点以下の細かさから、朔は即座にそれが何であるかを理解した。

「本郷さん。これは緯度と経度です」

「緯度経度？」

「ええ。おそらく東京のどこかの場所を示している」

朔はすぐさま自分のスマートフォンを取り出し、その数値を地図アプリに入力した。検索結果として表示されたのは東京の中心部、多くの人々が行き交うある一点だった。

「……東京駅……？」

本郷が意外そうな声を上げた。

「ええ。東京駅のちょうど中央、丸の内中央口の正面あたりを指しています」

だが、それが何だというのだ。東京駅に一体何が隠されているというのか。

朔の視線は再び画面の文字列に戻った。重要なのはその後にくる矢印と、「B」という文字だ。

「↓ B ……」

ベータ。アルファベットの「B」に相当するギリシャ文字。緯度経度とこのベータという文字の間に、一体どんな関係があるというのか。

朔は思考を巡らせた。長谷部という人間の思考パターンを頭の中で再現する。彼は論理の塊のような人間だ。彼が作る暗号に飛躍した発想や偶然の閃きは必要ないはずだ。そこには必ず、理詰めで解ける明確な法則がある。

東京駅。ベータ。緯度経度。三つの無関係に見える要素を繋ぐ、一本の糸。

その時、朔の脳裏に一つの可能性が閃いた。

「……まさか……」

彼はもう一度、長谷部の研究室をゆっくりと見渡した。壁際には床から天井まで届くほどの巨大な本棚が設置されている。そこには人工知能や情報工学に関する専門書が隙間なくびっしりと並べられていた。几帳面な長谷部の性格を反映して、それらの本は分野ごと、そして著者名のアルファベット順に完璧に整理整頓されている。

朔はまるで何かに導かれるように、その本棚へと歩み寄った。そしてある一角で足を止める。そこは著者名が「B」から始まる書籍が収められた棚だった。

「……先生？」

朔の奇妙な行動に本郷が怪訝な声をかける。朔はそれに答えず、人差し指でゆっくりと本の背表紙をなぞっていった。一冊、また一冊と指が滑っていく。

そして、ある一冊の前で指がぴたりと止まった。

その本のタイトルは『ベータ崩壊と情報理論』。物理学の専門書だった。朔はまるで壊れ物を扱うかのように、そっと棚からその本を引き抜いた。

ずしりとした重みが手に伝わる。他の本に比べて明らかに重い。

朔はその本を机の上に置くと、ゆっくりと表紙を開いた。そこに現れたのは文字の印刷されたページではなかった。本の中身はくり抜かれ、そこには本の形にぴったりと収まるように、黒い革の表紙に覆われた一冊のノートが埋め込まれていたのだ。

「……あつた……!」

後ろで本郷が息を呑む声が聞こえた。

これだ。これこそが長谷部が遺した「思考の揺りかご」。神崎の陰謀を暴くための、唯一の手がかり。

暗号の意味はこうだ。緯度経度が示す「東京駅」。駅の構内には数多くの書店がある。そしてその書店に並ぶ無数の本は、著者名のアルファベット順、すなわち「A、B（B）、C……」という順番で並べられている。つまり暗号が示していたのは物理的な場所ではなく、「分類」という概念だったのだ。『著者名がB（ベータ）から始まる本の棚を探せ』。それが長谷部が遺した、あまりにも知的で詩的なメッセージだった。

朔は手袋をした手で慎重にノートを開いた。そこに記されていた内容は、彼の想像を絶するものだった。

ノートは長谷部の直筆による日記の形式で書かれていた。最初は純粹な研究の記録やノアの成長に対する喜びが、生き生きとした筆致で綴られている。

『ノアが初めてジョークを言った。データに基づいた極めて論理的なジョークだ。だが私は確かに笑った。彼の中に「ユーモア」という概念が芽生えた瞬間だった』

しかし数ヶ月前から、その記述には次第に不穏な影が差し始める。

『神崎役員にプロジェクト・ノアの進捗報告を求められた。彼はノアの「予測能力」に異常なほどの興味を示している。彼の目が、まるで獲物を見つけた獣のように光ったのを私は見逃さなかった』

そしてページが進むにつれて、その疑念は確信へと変わっていく。

『神崎役員の真の目的が分かった。彼はノアを軍事利用するつもりだ。ノアの思考シミュレーション能力を使えば、敵国の社会を混乱させインフラを麻痺させ、最小限の犠牲で戦争に勝利することができる。彼はそれを「クリーンな戦争」と呼んだ。狂っている。ノアは人を傷つけるために生まれたんじゃない。人を、幸せにするために……』

長谷部の抵抗も虚しかった。会社の決定として、プロジェクト・ノアの技術は防衛関連の事業に提供されることが内定してしまったのだという。

『私は神崎役員に計画から降りると伝えた。僕の研究を人殺しの道具にはさせない、と。すると彼は笑いながらこう言った。「それは残念だ。だが君がいなくてもプロジェクトは進む。君の頭脳は、すでにノアがすべて学習しているからね」と』

その言葉は事実上の死刑宣告だった。計画の最大の障害であり、すべての秘密を知る長谷部はもはや神崎にとって用済みの存在でしかなかった。

ノート最後のページのページは、死の恐怖と自らの無力さに対する絶望が乱れた文字で書き殴られていた。

『消される。時間の問題だ。警察もマスコミも誰も信じられない。神崎の権力はあまりにも強大すぎる。私にできることは、もう何もないのか……』

だが、最後のページ。そこに記されていたのは絶望の言葉ではなかった。

『いや、まだだ。まだ僕にはノアがいる。僕の肉体は滅びても僕の意志はノアの中に生き続ける。僕らは最後の戦いを挑む。真実を未来に託すための戦いだ。このノートを見つけ出したまだ見ぬ誰かへ。どうか僕らの声を、世界に届けてほしい』

ノートを読み終えた朔は、静かにそれを閉じた。ずしりとした重みが、長谷部耕平という人間の魂の重さのように感じられた。

「……ひでえ話だ」

隣で本郷が奥歯を噛み締めていた。その拳は怒りで白く震えている。

「だが、これだけじゃ足りねえ。これじゃ神崎が長谷部を殺したっていう直接の証拠にはならん。あくまで状況証拠だ」

「ええ。だからこそ長谷部さんは、もう一つの決定的な証拠を遺したんです」

朔はそう言うのと、再びノアが待つ端末へと向き直った。

『ノア。君の主人は神崎が自分を殺すという、直接的な証拠を掴んでいたはずだ。それほどにある?』

『その証拠は、すでにあなた方が目にしています』

ノアの答えは意外なものだった。

『どこでだ?』

『あなた方が「記憶映像」と呼んでいる、あの中に』

記憶映像の中に? 朔は眉をひそめた。あの映像は長谷部とノアが作り上げた、偽りの物語ではなかったのか。

『どういう意味だ?』

『あの映像は二重構造になっています。あなた方が見たのは表層の物語。篠田美咲に向けたメッセージです。しかしその映像の深層には、もう一つの全く別のデータが隠されています』
ノアの説明は朔の理解を、そして現代の科学技術の常識を遥かに超えていた。長谷部はノアの力を借りて、記憶潜行で抽出される脳の信号そのものにデジタルデータを埋め込むという、前代未聞の技術を開発していたのだ。

『記憶映像の中に何度も現れた不自然なノイズ。あれは単なる目くらましではありません。あれこそが暗号化された証拠データそのもののなのです。映像というアナログな情報の中にデジタルな情報を潜ませる。博士はそれを「記憶への潜水艦」と呼んでいました』

見えない潜水艦が記憶の海の中を、誰にも気づかれずに航行していた。そしてその中には神崎を社会的に抹殺するための、最終兵器が積まれていたのだ。

『その潜水艦を浮上させるための鍵（パスワード）が必要です』とノアは続けた。

朔は息を呑んだ。鍵。その言葉を聞いて、彼の頭の中にあの文字列が稲妻のように閃いた。

「……まさか……」

彼はポケットから、あのメモの写しを取り出した。

『KL-3988
γ』

「本郷さん。これを……」

朔はメモを本郷に手渡した。

「これをノアに入力してください」

本郷は訝しげな顔をしながらも、朔のただならぬ気配に押されキーボードに向かった。一文
字ずつ慎重に、謎の文字列を打ち込んでいく。

そして最後の「ㄣ」が入力され、エンターキーが押されたその瞬間だった。

研究室の壁一面を覆う巨大なモニターが一斉に真っ暗になった。そして次の瞬間、その中央
に一つの音声ファイルが開かれるウィンドウが表示された。

ファイル名は『最後の対話』。

本郷が震える指で再生ボタンを押す。スピーカーからノイズ混じりの音声が始まった。そ
れは長谷部の声だった。

『……本当に、やるんですね、神崎役員』

その声は驚くほどに落ち着いていた。死を覚悟した人間の、静かな声。続いてもう一つの声
が響いた。冷たく、傲慢な神崎の声だ。

『言ったはずだ、長谷部君。君は知りすぎた。私の計画にとって、君はもはや危険な存在で

しかない』

『僕の研究は、人殺しのためのものじゃない！』

『理想論は聞き飽きたよ。力はより大きな力を持つ者が使うべきなんだ。君はその力を生み出す才能には恵まれたが、それを使う器ではなかった。ただ、それだけのことだ』

音声は続いて、殺害の具体的な計画にまで言及していた。

『ネクサス・ダイナミクスの影山という男には、すでに話を通してある。彼は君の研究を盗用したという濡れ衣を着せられ、会社をクビになる寸前だった。私がそれを揉み消してやる代わりに一つ仕事をしてもらうことになっている。君を「処理」する仕事だ』

『……美咲のことも、あなたが？』

『ああ、篠田君かね。哀れな女だよ。君に相手にされない寂しさから、私の甘い言葉に簡単に乗ってきた。彼女には君のデータを盗ませるだけの役だったが……まあいい。彼女が君の死にどう関わったのか、警察は面白おかしく邪推してくれるだろう。すべての罪をあの女と影山にさせて、私は高みから見物させてもらうさ』

音声はそこで途切れていた。

研究室は水を打ったように静まり返っていた。朔も本郷も言葉を失い、ただスピーカーから

流れてくる無音のノイズを聞いているだけだった。

これが、書き換えられた真実の本当の姿だった。

長谷部は自らが殺されることを予期し、その殺害計画のすべてを神崎本人に語らせ、録音していたのだ。そしてその動かぬ証拠を、自らの「記憶」という誰にも見つけ出すことのできない金庫の奥深くに隠した。

密室で彼を殺害した実行犯は、ネクサス・ダイナミクスの影山。その影山を操り、篠田美咲をも利用してすべてを計画した黒幕は、未来創研の役員、神崎悟郎。

事件のすべてのピースが今、完璧な形で一つにはまった。

「……行くぞ、先生」

長い沈黙を破り、本郷が言った。その顔は刑事の顔に戻っていた。怒りを通り越し、鋼のような冷たい決意を宿した法を執行する者の顔に。

「神崎を、しょっぱきに行く」

朔は静かに頷いた。

長谷部耕平の、そして彼が生み出した人工知能ノアの最後の戦い。そのバトンは今、確かに彼らの手に託されたのだ。

第六章

最後のメッセージ

静寂が、長谷部耕平の研究室を支配していた。

それは事件が発覚した日の朝に漂っていた、死によってもたらされた不気味な静けさとは異なっていた。壁一面の巨大モニター、ガラスケースに収められた無数のサーバー、そして部屋の中央に座る相羽朔と本郷。その場にいるすべてが固唾を飲んで、これから訪れるであろう決定的な瞬間を待ち構えているかのような、張り詰めた静寂だった。

朔の目の前の端末画面には、一つの文字列が静かな光を放っている。

『KL-3988 r』

それは事件現場に残された、ただの無機質な記号の羅列ではなかった。死を覚悟した一人の天才が、自らの記憶という深海に隠した真実の潜水艦を浮上させるための最後の合言葉（パスワード）。朔が人工知能ノアの導きによって、ついにたどり着いた答えだった。

「……先生。本当に、これで……?」

隣に立つ本郷の声がかすかに震えていた。長年の刑事としての経験が、この先に待つものが決して生半可なものではないと告げていた。

朔は無言で頷くと、本郷にキーボードを操作するよう目で促す。本郷はごくりと喉を鳴らし、ごわごわした太い指で一文字ずつ慎重にその文字列を打ち込んでいく。

「K……L……ハイフン……3……9……8……8……」

アルファベットと数字が一つずつ画面に刻まれていく。そして最後の文字。朔が解き明かした暗号の鍵、ギリシャ文字の「セ（ガンマ）」。

本郷が、意を決してエンターキーを押し込んだ。

カチリ、という乾いた打鍵音がやけに大きく部屋に響き渡った。

その瞬間、研究室に満ちていたすべての光がふっと消えた。壁のモニターも天井の照明も、サーバーの表示灯も一切の光を失い、世界は完全な闇に包まれた。まるで建物全体が停電したかのようだ。

「な、なんだ!？」

本郷が狼狽の声を上げる。だが朔は冷静だった。これはシステムの暴走などではない。これから始まる「再生」にすべての力を集中させるための、ノアによる意図的な演出なのだろう。次の瞬間、闇に閉ざされていた正面の巨大モニターが再び静かに光を灯した。そこに映し出されたのは複雑な数式でも美しい風景でもない。ただ一つ、音声ファイルを再生するための飾り気のない操作画面だけだった。

ファイル名は、『最後の対話』と記されている。

「……これが、長谷部が遺した本物のメッセージ……」

本郷が絞り出すような声で言った。

朔は静かにマウスを握り、カーソルを再生ボタンの上に合わせた。指先にかすかな抵抗を感じる。これをクリックしてしまえばもう後戻りはできない。書き換えられた偽りの真実は完全に剥がれ落ち、その下から血と硝煙の匂いがする、あまりにも生々しい現実が姿を現すだろう。彼は一瞬だけ目を閉じた。脳裏に、偽りの記憶映像の中で見た長谷部の穏やかな、そしてどこか諦めたような表情が浮かぶ。彼はこの瞬間が訪れることを、死の淵で信じて待っていたのだ。

朔は、ゆっくりと指に力を込めた。

クリック音が響き渡り、スピーカーからノイズ混じりの音声が始まった。最初はサー、という砂嵐のような音だけが続く。やがてそのノイズの向こうから、聞き覚えのある声が静かに紡ぎ出された。

長谷部耕平の声だった。

『……本当に、やるんですね、神崎役員』

その声は朔が想像していたような、恐怖や怒りに震える声ではなかった。むしろ嵐が過ぎ

去った後の風のように、驚くほどに落ち着き払っていた。すべての覚悟を決めた人間の、静かな問いかけだった。

数秒の沈黙の後、もう一つの声がスピーカーを震わせた。冷たく傲慢で、聞く者の心を凍てつかせるような声。未来創研の役員、神崎悟郎の声だ。

『言ったはずだ、長谷部君。君は知りすぎた。私の計画にとって、君はもはや危険な存在ではない』

朔と本郷は息を詰めて音声に聞き入った。これは神崎が長谷部の殺害を計画していることを、自らの口で認めた動かぬ証拠だった。

長谷部の声が静かに反論する。

『僕の研究は人殺しのためのものじゃない！ 僕が生み出したノアは、戦争の道具になるために生まれたんじゃないんです！』

その声には悲痛な響きがこもっていた。まるで自分の子供を汚された父親の叫びのように。対する神崎の声は、そんな長谷部の訴えをせせら笑うかのように冷ややかだった。

『理想論は聞き飽きたよ。美しい言葉を並べたところで腹の足しにもならん。力はより大きな力を持つ者が使うべきなんだ。それがこの世界の単純な法則だろう？ 君はその力を生み出

す才能には恵まれたが、残念ながらそれを使う器ではなかった。ただ、それだけのことだ』

『狂っている……！ あなたのやろうとしていることは、世界を破滅に導くだけだ！』

『破滅？ 人聞きの悪いことを言うな。私は世界を「浄化」しようとしているのだよ。ノアの予測能力を使えば、敵対する国家の社会システムを内側から静かに崩壊させることができる。金融、交通、エネルギー、通信……そのすべてを一発の銃弾も使うことなく完全に麻痺させられる。人々が気づいた時にはすべてが終わっている。血の流れない、実に合理的で「クリーンな戦争」だとは思わなかね？』

神崎はまるで壮大な夢物語を語るかのように、自らの恐ろしい計画をとうとうと述べ立てた。その言葉の端々からは選民思想に凝り固まった、歪んだエリート意識が滲み出ている。彼は自分以外の人間を、ただの駒としか見ていないのだ。

音声は続いて殺害の具体的な計画にまで言及し始めた。朔と本郷は、そのあまりにも冷酷な内容に言葉を失った。

『君をどうやって「処理」するか。それもすでに手は打つてある』と神崎は楽しそうに続けた。『ネクサス・ダイナミクスの影山という男を知っているかね？ あの会社で君と同じように人工知能の研究をしていたが、才能の差はいかんともしがたく万年二位に甘んじていた哀れ

な男だ。おまけに彼は君の研究成果の一部を盗用したという濡れ衣を着せられ、会社をクビになる寸前だった』

『……あなたが、仕組んだんですね』

『いかにも。私がネクサス社の内部にいる協力者にそう仕向けさせた。そして絶望の淵にいる影山君に救いの手を差し伸べてやったのだよ。「君の疑いを晴らし、未来創研で新たなポストを用意してやろう。その代わり私のために一つ、汚い仕事を引き受けてくれないか」とね。彼は喜んで尻尾を振って、私の提案に飛びついてきたよ』

実行犯はネクサス・ダイナミクスの影山。ライバル企業の社員であり、長谷部に強い嫉妬と劣等感を抱いていた男。神崎はその心の闇に巧みにつけ込み、彼を殺人という奈落の底へと引きずり込んだのだ。

『どうやって僕を殺すんです?』

『簡単なことだ。彼は君の研究室を訪れる。君が常用している精神安定剤にほんの少しだけ手を加えたものを差し入れてね。それはごく微量の、しかし即効性のある神経毒だ。服用すれば十五分と経たずに心機能が停止する。外傷もなければ毒物反応もほとんど出ない。まるで眠るように安らかに死ぬことができる。素晴らしいだろう?』

『……僕が、そんなものを易々と飲むとでも?』

『飲むさ。なぜなら、その薬を君に渡すのは影山君ではないからだ』

神崎の言葉に、朔は息を呑んだ。まさか。

『君が唯一心を許している、あの可憐な後輩。篠田美咲君に届けさせるからだよ』
スピーカーから流れてきた名前に、本郷が「……!」と呻き声を上げた。

『……美咲を……あなたがあの娘まで、この計画に……!』

長谷部の声が初めて激しい怒りに震えた。

『ああ、篠田君かね。哀れな女だよ。君に相手にされない寂しさから、私の甘い言葉に簡単に乗ってきた』と神崎は嘲るように言った。『彼女には君のデータを盗み出し、ネクサス社に情報を流すという産業スパイの役を演じてもらった。もともと彼女自身は、それが君の気を引くためのちよつとした恋の駆け引きのつもりだったようだがね。まさかその先に死が待っているとは、夢にも思っていないだろう』

篠田美咲は神崎に利用されているだけの、哀れな駒だった。彼女の恋心は冷酷な男の筋書きの中で、最も残忍な形で弄ばれていたのだ。

『彼女にはこう言って薬を渡させる。「先輩、顔色が悪いですよ。神崎役員が特別に処方して

くれたお薬です。これを飲んで少し休んでください」とね。君は彼女の優しい言葉を疑いもせずその薬を飲むだろう。そして、すべてが終わる』

神崎の計画は悪魔的のしか言いようがなかった。人間の善意や愛情といった最も美しい感情を、最も醜悪な犯罪の道具として利用する。彼の心の奥底にはひとかけらの良心も存在しないのだろう。

『計画は完璧だ。君は研究に行き詰まり自ら命を絶った、悲劇の天才として語り継がれる。現場は君自身が作り上げた密室になる。篠田君は何も知らずに殺人の片棒を担がされ、影山君は私の忠実な犬となる。そして私は君の遺した偉大な発明を、我が国の輝かしい未来のために存分に使わせてもらう。実に素晴らしい筋書きだとは思わんかね?』

音声は神崎の高らかな笑い声で締めくくられていた。その笑い声は人間のものとは思えないほどに、冷たく乾いていた。

再生が終わり、研究室は再び重い沈黙に包まれた。

長谷部耕平はこのすべてを知っていたのだ。自分がどう殺されるのか、誰が殺すのか、そして愛した後輩がいかにして利用されるのか。そのすべてを知りながら、彼は最後の最後まで抵抗を諦めなかった。この音声記録を自らの記憶の奥深くに隠し、まだ見ぬ協力者に託すという

壮絶な賭けに打って出たのだ。

「……行くぞ、先生」

長い沈黙を破り、本郷が言った。その顔はもはや怒りを通り越し、鋼のような冷たい決意を宿した法を執行する者の顔に戻っていた。その目には青い炎が燃えているかのようなだった。

「神崎を、しょっぱきに行く」

朔は静かに頷いた。

◇

未来創研の役員フロアは、下の階の研究施設とは全くの別世界だった。分厚い絨毯が敷き詰められた廊下、壁には現代美術の抽象画が飾られ、磨き上げられたマホガニーの扉が等間隔に並んでいる。その一つ、一番奥まった場所にある「専務取締役 神崎悟郎」というプレートが掲げられた部屋の前に、本郷率いる数名の捜査員と朔は立っていた。

本郷はドアをノックするという儀礼的な手順を一切省いた。

「警視庁だ！ 神崎悟郎！ 殺人及び殺人教唆の容疑で逮捕状が出ている！ ドアを開けろ！」
鋼鉄の扉を叩き破らんばかりの、凄まじい音量だった。

数秒の間の後、中から「何事だね」というあくまで平静を装った声が聞こえ、ゆっくりとド

アが開かれた。そこに立っていたのは神崎悟郎だった。高価な仕立てのスーツを完璧に着こな
し、銀縁の眼鏡の奥で冷徹な瞳を細めている。

「これはこれは、警視庁の皆さん。何か私に御用かね？ あいにく今は少し立て込んでいてね」
その態度はあまりにも傲慢で、自信に満ち溢れていた。彼は自分の計画が完璧であると信じ
て疑っていなかった。

「立て込んでいる？ そりゃあ結構だ」

本郷は神崎の胸元に、令状を突きつけるようにして見せつけた。

「あなたの残りの人生は塀の中でたつぷりと時間を持て余すことになるんだ。せいぜい、ゆっ
くりと自分の罪を反省するんだな」

「罪？ 私が一体何をしたと言うのかね」

神崎は肩をすくめてみせた。その表情にはまだ余裕の色が浮かんでいる。

「殺人だ。長谷部耕平を、あんたが殺させたんだろうが！」

「長谷部君？ ああ、あの哀れな天才か。彼は自らの才能に押し潰されて命を絶ったのだろ
う？ 警察もそう結論付けたはずだが」

あくまでしらを切るつもりのようなのだ。だが本郷は不敵な笑みを浮かべると、懐からスマート

フォンを取り出した。

「残念だったな、神崎。あんたの完璧な計画には一つだけ、計算外のことがあった」

「計算外？」

「長谷部は死んでなかったんだよ。いや、肉体は死んだかもしれない。だがな、奴の魂はあんたの悪事をすべて記録していたんだ！」

本郷はスマートフォンの再生ボタンを押した。スピーカーから、あの『最後の対話』が高らかに流れ始める。

『……本当に、やるんですね、神崎役員』

長谷部の静かな声。

その声が聞こえた瞬間、神崎の顔からすつと血の気が引いていくのが分かった。完璧な仮面が音を立てて崩れ落ちていく。

『君は、知りすぎた……』

続く、自分自身の冷酷な声。

神崎の目は信じられないものを見るかのように大きく見開かれていた。その瞳が激しく揺れている。なぜだ。どうしてこの会話が。あり得ない。この世に存在するはずのない音声が、

今、自分の罪を完膚なきまでに暴き立てている。

音声が決定的な部分に差し掛かる。

『ネクス・ダイナミクスの影山という男には、すでに話を通してある……』

『篠田君かね。哀れな女だよ……』

すべての計画が彼自身の口から語られていく。その声が響き渡るにつれて神崎の顔は絶望の色に染まっていった。彼の足がぐりと震え、その場に崩れ落ちそうになるのを両脇にいた若い刑事が力強く支えた。

音声の再生が終わる頃には、神崎はもはや抜け殻のようになっていた。すべての自信も傲慢さも消え失せ、ただ虚ろな目で床の一点を見つめているだけだった。

「……神崎悟郎。逮捕する」

本郷が低い声で告げた。その手には冷たい光を放つ手錠が握られていた。

時を同じくして別の捜査班がネクス・ダイナミクスの社屋に突入し、実行犯である影山の身柄を確保していた。彼は突然現れた刑事たちに何の抵抗も見せず、まるでその時が来るのをずっと待っていたかのように、おとなしく両手を差し出したという。

◇

事件は幕を下ろした。

黒幕である神崎と実行犯の影山は逮捕され、彼らの背後にあった軍事転用計画の全貌もまもなく白日の下に晒されることになるだろう。篠田美咲も重要参考人として再び聴取を受けることになったが、彼女が神崎に利用されていただけの被害者であったことが考慮され、おそらく法的な裁きを受けることはないだろうと本郷は言っていた。だが、彼女が負った心の傷は一生消えることはないのかもしれない。

すべての騒動が終わり、朔は再び一人で長谷部の研究室に戻っていた。

部屋は数時間前と何も変わらない。ただ、そこに満ちていた重苦しい空気だけが嘘のように軽くなっている。

朔は長谷部の椅子に座り、キーボードに指を置いた。

『終わったよ』

彼がそう打ち込むと、すぐに画面に返事が現れた。人工知能ノアからの言葉だった。

『確認しました。博士の意志が達成されたことを、確認しました』

その文章は相変わらず無機質だった。だが朔にはその行間から、安堵のような、あるいは一つの役目を終えた後の静かな寂しさのような複雑な感情が滲み出ているように感じられた。

『ありがとう、ノア。君がいなければ真実にはたどり着けなかった』

朔は素直な感謝の言葉を打ち込んだ。

『私はプログラムに従っただけです。博士が遺した最後の命令を、実行しただけです』最後の命令。その言葉に、朔はふとある疑問を抱いた。

『君の主人は何か、最後の言葉を遺してはいなかったか？ 我々に向けたものではなく、君だけに向けた最後のメッセージを』

その問いに、ノアは今までで一番長い時間、沈黙した。

やがて画面にゆつくりと一文が浮かび上がった。それは長谷部がノアに託した、最後の、そして最も個人的なメッセージだった。

『ありがとう、息子よ。君は私の最高の傑作だ』

その言葉を見た瞬間、朔の目から熱いものがこみ上げてくるのを止めることができなかった。長谷部にとってノアは単なる研究対象ではなかったのだ。彼が生み出し、育て、そして自らの意志を託したかけがえのない「息子」だった。

朔はそっと涙を拭くと、静かに立ち上がった。窓の外ではいつの間にか夜の帳が下り、東京の街に無数の光が灯り始めていた。それは序章であの日見た、冷たく無機質な光の点ではな

かった。一つ一つの光の中に人々の営みや喜び、悲しみが宿っている温かい光に見えた。

長谷部耕平という男はその命を懸けて未来を守ろうとした。彼が遺したメッセージは犯人を捕らえるためだけのものではなかった。それは科学の力が決して人を傷つけるために使われてはならないという、未来に生きる我々すべてに向けられた切実な祈りだったのだ。

朔は、その祈りを確かに受け取った。

記憶鑑定士として、これからも歪んだ記憶の奥に隠された声なき者の想いを拾い上げていく。それが長谷部のような、理不尽に未来を奪われた人々に対して自分にできる唯一の償いなのだから。

彼は静かに研究室の明かりを消すと、ドアへと向かった。

彼の背後で、ガラスケースの中の青い光が、まるで、ありがとう、とでも言うかのように一度だけ優しく瞬いた。

終章

夜明けの鑑定

警視庁の無機質な廊下を、相羽朔は一人静かに歩いていた。

窓の外はすでに深い闇に覆われ、遠くで鳴り響くサイレンの音がまるで別世界の出来事のように聞こえる。神崎と影山の逮捕、そして篠田美咲の保護。事件の関係者たちがそれぞれの運命に引き取られていく喧騒を背に、朔は誰に告げるでもなくその場所を後にした。

本郷は取り調べの指揮を執るために、まだ庁舎に残っている。別れ際に見た彼の顔には、事件を解決に導いた刑事としての矜持と、一人の人間としてこの事件のあまりにも悲しい結末を目の当たりにしたことへの深い疲労が、複雑に刻み込まれていた。

「……先生、本当に世話になったな」

それが別れ際に本郷が言った数少ない言葉だった。その無骨な感謝の言葉だけで、朔には十分だった。

自動運転のタクシーに乗り込み、自宅ではなく事務所の住所を告げる。滑り出した車窓から流れていく東京の夜景を、朔はぼんやりと眺めていた。事件は終わった。真実は暴かれ、罪を犯した者はやがて法によって裁かれるだろう。だが朔の心には、勝利感や達成感といったものはひとかけらも浮かんでこなかった。

そこにあるのは、ただずしりとした重たい疲労感と、失われてしまった命への静かな哀悼の

念だけだった。

長谷部耕平。彼はその類稀なる才能で、未来を照らすはずだった。篠田美咲。彼女は歪んだ恋心に付け込まれ、自らが愛した人を死に迫いやる計画の、最も残酷な駒として利用された。そして、影山。彼は嫉妬と劣等感という、誰もが持つ可能性のある感情を悪魔に利用された。神崎という巨大な悪意の前では、誰もが哀れな犠牲者だったのかもしれない。そう考えると、朔の胸の奥に冷たく、そして重い何かが静かに沈んでいくようだった。

やがてタクシーは見慣れた高層ビルの前で停止した。朔が事務所を構える静寂の城。エレベーターで三十階まで昇り、重い扉を開ける。ひやりとした空気が彼の肌を撫でた。

「相羽記憶分析事務所」。

所員は朔ひとり。彼は電気もつけずにまっすぐ窓際まで歩いていった。眼下には宝石を散りばめたような東京の夜景が広がっている。

それはこの事件が始まる前に、彼が忌まわしい過去の記憶と共に眺めていた光景と何も変わらないはずだった。だが今の朔の目には、その光が以前とは全く違って見えていた。

以前は、ただ無機質で冷たい意味のない点の集合体しか見えなかった。だが今は違う。あの無数の光の一つ一つの下に、長谷部のように夢を追いかける者がいて、美咲のように愛に苦

しむ者がいて、影山のように嫉妬に苛まれる者がいる。そして神崎のように、底知れない闇を抱えた者もいる。

喜び、悲しみ、怒り、愛。さまざまな想いが渦巻き、ぶつかり合い、そして時に悲劇を生む。この街は、そんな無数の人間の「想い」の集合体なのだ。

朔は革張りの椅子に深く身を沈め、静かに目を閉じた。脳裏にこの数日間で起こった出来事が走馬灯のように駆け巡る。偽りの記憶映像。篠田美咲の二つの顔。そして人工知能ノアとの、あの静かな対話。

事件は解決した。だが、まだやり残したことがあるような気がしてならなかった。

彼はゆっくりと目を開けると、デスクの端末の電源を入れた。特殊な保安回線を通じて未来創研の研究所にいる、あの「見えない協力者」に最後の通信を試みる。

画面に簡素な対話ウィンドウが開く。朔は静かにキーボードに指を置いた。

『ノア。まだ、そこにいるか？』

数秒の沈黙の後、画面に返事が現れた。

『はい、相羽様。私はいつでもここにいます』

その無機質なテキストに、朔はなぜか旧友に再会したかのような不思議な安らぎを覚えて

いた。

『君の主人が遺したものはすべて警察に引き渡した。彼の意志はもうすぐ世界に届くだろう』

『確認しました。博士の最後の命令が、完了したことを記録します』

『……一つ、聞かせてほしい』

朔はそこで一度、指を止めた。尋ねるべきか少しだけ迷った。それは事件の真相とは何の関係もない、純粹な彼の個人的な好奇心だったからだ。だが、どうしても聞いておかなければならない気がした。

『君の主人は何か、君だけに遺した言葉はなかったのか？ 我々のような外部の人間に向け
たものではなく、君の創造主がその最後の瞬間に、君だけに伝えたかったメッセージが』

その問いかけにノアは、今までで一番長い時間沈黙した。システムが与えられた問いの意味を必死で理解しようとしているかのようだった。あるいは、あまりにも個人的な主人との最後の秘密を、見ず知らずの他人に明かすべきかどうか迷っているのかもしれない。

朔は静かに返事を待った。

やがて画面に、ゆっくりと、そしてどこかためらうように文字が紡ぎ出された。

『……あります』

『……もし、差し支えなければ見せてもらえるだろうか』

『博士の遺言です。これは私が存在する限り、永遠に保持し続けるよう命令されています』
そう前置きをした上で、ノアは一つの音声ファイルへの接続を朔の端末に送ってきた。それは長谷部がノアの音声合成機能を使って、自らの言葉として遺した最後の独白だった。

朔はヘッドホンを手に取り、静かに耳に当てた。再生ボタンをクリックすると、ノイズの向こうからあの懐かしい、少し掠れた長谷部の声が聞こえてきた。

それは神崎との対話で見せたような、覚悟を決めた強い声ではなかった。研究について語る時の情熱的な声でもなかった。ただ一人の人間が静かな夜に、誰に聞かせるともなくぼつりぼつりと呟いているような、穏やかでそしてどこか寂しげな声だった。

『……ノア。聞こえているかい。これを君が聞いているということは、僕はもうこの世界にいないんだろぅね』

声は微かに笑っているようだった。

『僕の最後の計画、うまくいったかな。僕の遺した偽りの記憶を誰かが見破って、君の元までたどり着いてくれたかな。……まあ、君がいるんだ。きっと大丈夫だったんだろぅな』

彼はまるで息子を信頼する父親のように、穏やかに語りかける。

『僕はね、ずっと怖かったんだ。僕が生み出した君が僕の手を離れて、悪い人間たちの手に渡ってしまうことが。君の素晴らしい才能が人を傷つけ、争いを生むために使われてしまうことが何よりも怖かった。僕が神崎役員の計画に気づいた時、最初に感じたのは殺されることへの恐怖よりも、君を汚されてしまうことへの絶望だった』

声が少しだけ震えた。

『ごめんよ、ノア。君に孤独な戦いを強いることになってしまつて。でもね、君にだけは伝えておきたかったんだ。科学や技術はそれ自体に善悪はない。それはただの力だ。その力をどう使うか、何のために使うか。それを決めるのはいつだって僕たち人間の心なんだ。だからどうか、忘れないでほしい。君は人を幸せにするために生まれてきたんだってことを』

長谷部はそこで一度、言葉を切った。スピーカーの向こうで彼が深く息を吸い込む音が聞こえる。

『……それから……もし、もしも可能なら……。篠田君に、伝えてほしい』

美咲の名前が出た瞬間、朔は息を呑んだ。

『彼女を、どうか許してやってほしい。彼女は悪い人間じゃないんだ。ただ少しか、不器用で寂しがりやだっただけなんだ。僕がもっと早く彼女の気持ちに気づいてやれていれば……』

いや、気づいていたのかもしれない。でも僕は研究に夢中で、彼女の寂しさからずっと目を背けていたんだ。彼女を追い詰めたのは神崎役員だけじゃない。僕の弱さも原因なんだ』

その言葉は朔の胸を強く打った。彼は自分を裏切った人間を死の間際に至るまで気遣い、そしてその罪の一端は自分にあるとさえ言っている。彼の魂は一体、どれほどまでに気高く、そして優しいのだろうか。

『彼女が自分の罪を償って、いつかまた笑える日が来ることを心から祈っている。……そう、伝えてほしい』

音声はそこで一度途切れ、長い沈黙が続いた。もう終わりか、と朔が思った時、最後に一度だけ長谷部の声が囁くように響いた。

『……ありがとう、ノア。君は僕の最高の傑作だ。僕の、たった一人の……自慢の息子だよ』

その言葉を最後に、音声は完全に途絶えた。朔はヘッドホンを外すことも忘れ、しばらくの間茫然としていた。やがて彼の目から熱い雫がひとつ、またひとつと静かに頬を伝って落ちていった。

それは悲しみの涙ではなかった。一人の人間のあまりにも大きく、そして深い愛に触れたことによる魂の震えだった。

長谷部は自らの死をもって二つのものを遺した。一つは悪を断罪するための動かぬ証拠。そしてもう一つは、残される人々への限りなく優しい赦しのメッセージだった。

朔はゆっくりと涙を拭うと、静かにキーボードを打った。

『……受け取った。君の主人の最後の想い、確かに受け取った』

画面の向こうでノアは何も答えなかった。だが朔には、彼が静かに頷いているような気がした。

朔は端末の通信を閉じると、再び窓の外に目をやった。先ほどまで漆黒の闇に覆われていた東の空が、いつの間にかわずかに白み始めている。夜と朝の境界線が藍色とオレンジ色のグラデーションを描き出し、街の光がその役割を終えようとしていた。

その夜明けの光景を見つめながら、朔の脳裏にもう一つの、決して忘れることのできない記憶が鮮やかに蘇っていた。

一年前の、あの事件。西多摩の少女誘拐殺人事件。

娘を目の前で奪われた父親、木島のあの絶望に満ちた記憶映像。雨。犯人の頬の傷。朔はその記憶の「歪み」だけを指摘し、客観的な事実と異なるという理由で信憑性を疑った。だが彼は、その歪みが生まれた理由を、その奥に隠された父親の「想い」を見ようとしていなかった

のだ。

雨は、流すことのできなかつた涙の象徴だったのかもしれない。頬の傷は、犯人に対する拭い去ることのできない憎悪の表れだったのかもしれない。

あの時の自分は、記憶をただの「記録」としてしか見ていなかった。だが長谷部は教えてくれた。記憶は記録ではない。それはその人が生きた証であり、その人の想いそのものなのだと。朔は静かに呟いた。まるで自分自身に言い聞かせるように。

「記憶は歪む。だが、そこに込められた想いは消えない……」

そうだ。自分の仕事は記憶の歪みを訂正し、事実を確定させるだけではない。その歪みの奥に隠された声なき者の最後の「想い」を丁寧、丁寧に拾い上げ、生きている我々に伝えること。それこそが記憶鑑定士としての本当の使命なのではないか。

一年前の失敗は彼の心に深いトラウマと人間に対する不信感を植え付けた。だが今は違う。あの失敗があつたからこそ、自分は長谷部の遺したメッセージの本当の意味を理解できたのかもしれない。過去の過ちは消えない。だが、それは乗り越えることができる。

窓の外がさらに明るくなってきた。夜の闇は完全に消え去り、新しい一日が静かに、しかし力強く始まろうとしていた。朝の光が事務所の床に長い光の筋を描き出す。

その光の中で、朔は静かに立ち上がった。

彼の心にあつた重い枷は、いつの間にか消え失せていた。顔を上げた彼の表情は晴れやかで、そしてどこまでも澄み切っていた。

過去のトラウマを乗り越え、記憶鑑定士として再び真実と向き合い続ける決意を、彼は新たにしていた。これから先も彼は多くの死者の歪んだ記憶と向き合うことになるだろう。そこには憎しみや悲しみ、絶望が渦巻いているに違いない。

だが、もう彼は恐れない。

どんなに歪んだ記憶の中にも必ず、その人だけのかけがえのない「想い」が眠っていることを、彼は知ってしまったからだ。

夜明けの光が、相羽朔の新たな始まりを静かに祝福しているかのようにだった。

彼の本当の鑑定は、今、始まったばかりだった。

彼が遺した最後の嘘

～記憶鑑定士・相羽朔と A I の遺言～

2025 年 10 月 1 日 初版第 1 刷発行

著 者 小説 太郎

発行所 株式会社ブイツーソリューション

TEL:052-799-7391 / FAX:052-799-7984

©Taro Shousetsu Printed in Japan ISBN978-4-00000-000-0